第3回誌上俳句大会　入選作品集

目　次

ごあいさつ……2
選者紹介……4
大賞および特別賞受賞作品……6
選者選作品　井越　芳子……8
菊田　一平……14
嶋田　麻紀……20
能村　研三……26
原田　清正……32
平手ふじえ……38
松尾　隆信……44

ごあいさつ

ＮＨＫ学園理事長　浜田泰人

本日ここに「ＮＨＫ学園生涯学習フェスティバル　第３回誌上俳句大会」を、皆様とご一緒に開催させていただきます。

今回お寄せいただいた作品数は、自由題、題詠あわせて六、一一七句にのぼりました。「道」を詠みこんだ、多くの素晴らしい作品が集まりました。お寄せいただいた俳句の一つ一つは、作者おひとりおひとりの心のうちに、この文芸が深く根を下ろしていることを教えてくれます。日々のくらしと経てきた人生経験を見つめ、俳句を通してみずからの言葉と心のあり方を探求されておられる方々がこんなにも多くいらっしゃることを知り、心より感銘を受けております。

わが国の古い伝統の上に築かれた短詩型文芸は、時代が変わってもその意義は変わりません。

昭和五十六年に開設された俳句講座は、これまでの三十九年間に、五十四万人を超える方々が学んでこられました。この流れがさらに大きく豊かになっていくことを願い、講座内容をはじめこのような大会や俳句学習の旅（スクーリング）など、教育文化事業の充実に、なお一層努めてまいりたいと思っております。多くの皆様のご参加とご支援を、よろしくお願い申し上げます。

なお、本日の大会大賞三作品は、各地で開催される大会の大賞作品とともに令和二年度の文部科学大臣賞候補作品となります。

最後になりましたが、大会の開催にあたり、選者の先生方、ご投句いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

令和二年三月十日

ごあいさつ

公益社団法人俳人協会理事長　能村研三

この度は「ＮＨＫ学園第３回誌上俳句大会」をＮＨＫ学園と共催にて開催の運びとなりました。

ＮＨＫ学園においては全国俳句大会をはじめ各地域での俳句大会を開催しており、当協会においても全国俳句大会を毎年開催しているところであります。しかしながら、俳句大会には参加したいが、中々会場まで足を運ぶことが出来ない方々も多くいらっしゃいます。この誌上俳句大会はそんな方々には家に居ながらにして参加できる好適な機会であると思われます。「俳句は一つ土俵」と言われています。最近俳句を始めたばかりの素人の方、長年俳句に携わる玄人の方も同じ俳句大会という一つの土俵で評価を受けることが出来る公平平等なものであります。

この大会には高齢の方々から若い世代まで幅広い投稿があると聞いております。日本の詩歌の伝統を引き継ぐ俳句の詩形を大切にしながら、次の世代に俳句をしっかりと受け継いでいけるためにも、この俳句大会は有意義なものであります。

最後に、本大会にご尽力を賜りました関係各位の皆様に深く感謝申し上げますと共に、多くの作品の選にあたられました選者の先生方に心から御礼申し上げます。

本大会が皆さまにとりまして、実りのある交流の場となりますことをお祈りいたします。

令和二年三月十日

選者紹介

井越　芳子（いごし　よしこ）「青山（せいざん）」同人
昭和三十三年東京都生れ。公益社団法人俳人協会評議員。
句集『木の匙』『鳥の重さ』『雪降る音』。

戸口より真昼の見ゆる落花かな

菊田　一平（きくた　いっぺい）「や」「晨（しん）」同人、「唐変木（とうへんぼく）」代表
昭和二十六年宮城県生れ。辻桃子、今井杏太郎に師事。
公益社団法人俳人協会幹事。
句集『どつどどどどう』『百物語』。

見覚えの雛がぽつんと瓦礫山

嶋田　麻紀（しまだ　まき）「麻（あさ）」主宰
昭和十九年茨城県生れ。菊池麻風に師事。公益社団法人俳人協会評議員。
句集『史前の花』『評論集『自註菊池麻風集』再誦』など。編著『秀句350選・色』。

田一枚隠して榛の花咲けり

能村　研三（のむら　けんぞう）「沖（おき）」主宰　ＮＨＫ学園講師
昭和二十四年千葉県生れ。昭和四十六年創刊間もなくの「沖」に投句、福永耕二の指導を受ける。昭和五十一年「沖」同人。平成十三年、「沖」主宰を継承。公益社団法人俳人協会理事長、日本ペンクラブ会員、日本文藝家協会会員、千葉県俳句作家協会会長、市川市俳句協会会長。句集『鷹の木』（俳人協会新人賞）『騎士』『海神』『磁気』『滑翔』『肩の稜線』『催花の雷』。

桃活けて壷中の闇を濃くしたり

原田　清正（はらだ　きよまさ）「橡（とち）」幹事長
昭和二十一年群馬県生れ。堀口星眠に師事。公益社団法人俳人協会　群馬県支部長。句集『仔馬』。

何事もおこらずバレンタインの日

平手ふじえ（ひらて　ふじえ）「雪垣（ゆきがき）」同人
昭和三十一年栃木県生れ。中西舗土に師事。公益社団法人俳人協会幹事。平成六年雪垣新樹賞受賞。

つばくろを出迎へてゐる核家族

松尾　隆信（まつお　たかのぶ）「松の花（まつのはな）」主宰
昭和二十一年兵庫県生れ。山口誓子、秋元不死男、上田五千石に師事。公益社団法人俳人協会評議員。日本文藝家協会会員、ＮＨＫ文化センター横浜ランドマーク教室講師。句集『雪渓』『おにをこぜ』『弾み玉』など八冊のほか『季語別松尾隆信句集』。評論『上田五千石私論』。

三月へのびのびと伸び富士の裾

NHK学園第3回誌上俳句大会大賞

〈自由題〉

百年の一炊の夢冬至粥

埼玉県　秋元虹雪

海胆を割く老斑の掌のたしかなる

熊本県　髙本よしえ

〈題詠「道」〉

黄泉路まで少し道草日向ぼこ

岐阜県　藤根　豊

俳人協会賞

鰤起し佐渡を幽かに浮かせけり

埼玉県　築根　喜美江

井越　芳子　選

【特　選】

黎明の水の地球の古代蓮　栃木　石塚信子

蓮は、東の空が白みかける早朝に開花し、午後に閉じる。これを繰り返し、四日目に花びらを散らす。「黎明の水の地球の」という把握と表現のスケールの大きさに惹かれる。一本の古代蓮を前に、その先に広がる蓮の花へ、そして地球上に今開いているであろう蓮の花まで見えてくるようである。

ほんたうの空を捉へて雪の富士　新潟　本間加津

「ほんたうの空」ってどんな空だろうと思う。答えはすぐに出た。「雪の富士」が捉えている空なのだ。確かに、空を意識するのは、春の空でも、夏の空でも、秋の空でもなく、雲一つない深く澄みわたった青空の冷たさだったことを思う。

……題詠「道」……

白鳥の沼に光の道あるる　埼玉　浜田はるみ

白鳥は、冬、日本に渡ってくる。夜があけてくる気配に鳴きながら動きはじめる。朝日は、水面を輝かせながら最も強い一筋の光の道を作る。「白鳥の沼」「光の道あるる」。これだけで白鳥のさまざまが見えてくる。ここに「道」という一文字がなければ描きだせなかった美しさだ。

【秀　作】

雪足して大仏の膝丸めけり　青森　神　繁雄
蟬落つるかすかなる音爆心地　千葉　露木　伸作
炎天の坂のぼりきてひとりかな　静岡　池谷　硬司
人生の集まっている日向ぼこ　千葉　松本八重子
小鳥来るたびに図鑑の栞落つ　東京　藤田　雅明
侘助の咲き継ぐ白さ妹は亡し　新潟　川澄　陽子
曲り家の土間静もりて冬菜かな　福島　五ノ井研朗
鳰の声渡りて靄の動き出す　大阪　角　雅行
降る雪に埋れし庵煙立ち　東京　井口　義則
狛犬の阿の口ふさぐ蔓枯れて　大阪　安岡　房子
中天に刺さる煙突どこか春　大阪　椋本　望生
草萌や仔山羊の耳は日に透きて　岡山　高原　晴子
ハープ橋奏でるやうに夏燕　埼玉　金子　絹子
モネの絵の水ひそひそと春動く　兵庫　鳥越やすこ
花野行く雲は力を抜いてをり　愛知　三吉　昌子
雪女自動ドアを開けにけり　山形　斉藤　隆夫
冬の月ビルを浮かせて宵の口　熊本　阿部　壽子
物音を閉ぢ込めてゆく夜の雪　福岡　山本　則男
微光にも白樺さめる十二月　北海道　中田　實
北上の流れのやうな冬夕焼　神奈川　上原　康子

……題詠「道」……

冬あたたか道いっぱいに売る野菜　東京　清水喜代美
道の端へ寄せられし死や草の花　埼玉　吉野利美子
夕焼けや傾くままに道標　千葉　越川　三朝
白杖に道譲りたる冬日かな　東京　青木　素子
畦道や東に白き冬の月　宮城　工藤　昭和

〈佳　作〉

掲載は氏名五十音順です。

柿の花五右衛門風呂の白熱灯　四十物文代
ボール蹴る子らの声聞く秋高し　秋元　さよ
風の中小さく燃えし雁来紅　秋元　虹雪
鬼柚子の凹凸深む海の町　秋山ユキ子
被災地の音の固まる冬銀河　浅川　走帆
鮎に串大袈裟に体くねらせて　浅野　公夫
短日の銀座の暮色惜しみけり　浅野　浩利
雪吊の朝の空気を絞り上ぐ　あまの樹懶
嵐止む端然守一（もりかず）夜の月　雨宮　玲子
飛行機のすぐ摑めさう五月晴　荒川　光江
鉛筆を削り揃へて年深む　粟村　勝美
読みさしの新書に挟む柿若葉　五十嵐　守
煌々の月影戻る投網かな　五十嵐良一
へろへろと来て水飲む鴉残暑かな　生田　伸子
岩清水地球の息吹汲みにけり　石川　明
秋の野に火を焚くものの黒き帽　石橋　徹生
万の向日葵焦がす地球の温暖化　石村　流翠
秋渇き命を燃やす里の山　井塚　紫香
天龍の奔流を呼ぶ大夕焼　井出久美子
冬空を大きく廻す鳶かな　井出久美子

撒き餌の光る柄杓に白鳥来　糸井　幸子
低空を軍用機来る枯野かな　伊藤　孝一
ターナーの淡き色合ひ雪催　伊藤　哲
蛍火や人は生涯灯を求め　伊藤　舜
音軽く嶺の影鋤く春田かな　伊藤はじめ
赤のまま咲き広ごれる被災の地　稲葉　京閑
秋立つや動くともなきけふの雲　井口冨士夫
渾身の最後の一球夏制す　井口冨士夫
巨大なる筆鋒鷹の舞ふごとく　井口冨士夫
虫の鳴く息するやうに間を置きて　井口冨士夫
碇泊の巨船の明かり夜の秋　井口冨士夫
短日のカーブミラーに夕日かな　茨木由己子
水桶の水なみなみと神の留守　今井　哲也
日向ぼこ忘れし事を思い出す　今井　哲也
巨船の上巨雲の光五月風　今泉　忠芳
たんぽぽやブラックホールは見られたり　岩﨑　千樹
冬銀河子に反骨の喉ぼとけ　梅田ひろし
冬凪や灯離るる豪華船　江里口水子
膝の子の肌のほてりよ荒神輿　大内田芳乃
飛驒人の素朴な便り冬ぬくし　逢坂　紀子

数式の板書飛び交ふ燕　小島　徹
新米をおひつに移す母の夢　太田　正之
家ぢゆうに湯気の溢れて餅の音　大玉　雅之
気温五度出会ふ人なき紅葉狩り　大成　金吾
からからと音を繋げて蓮の骨　岡　まゆみ
命綱千木より貫ひ雪降ろし　岡崎　健風
マンホールに落つる水音春隣る　岡崎　健風
ちんぐるま池塘は氷河期の窪み　岡澤　田鶴
寒林のすべての木霊統ぶる塔　岡澤　田鶴
破れ寺に似たる姿や枯蓮　岡田　育子
やはらかき旅の鞄や草の絮　岡田　春人
群といふ微かな孤独浮寝鳥　岡田　政信
煮凝の冷たき朝やくもる窓　要　へい吉
夏霧に包まれてゐるケルンかな　小川美津子
寒風や遠くのビルに日の残る　小川美津子
梵鐘の流る山寺夕紅葉　荻野　豊一
百年の槌の手光り砧打つ　沖野　遊民
家々は入り江に拠れり蜜柑山　奥田　豊
結局は妻が立ちたる掘炬燵　奥村　利夫
枯菊の括られしまま焚かれけり　奥村真由美

猪狩りの無線ひづめの向き知らす　尾崎恵美子
冬茜火の海通り越す一機　小田誠一郎
子の杵に手を添へ共に餅を搗く　小野　宗利
縄跳びの宙を浮いてる時間かな　小俣　友里
百日の雪との暮らし始まりぬ　金子　照栄
除夜の鐘昭和平成遠ざかる　金子　照栄
車座の鯨舟歌秋祭　川辺　谷平
水澄みて美しき人逝きにけり　菊地　孝也
鶴万羽鳴き交ふ空となりにけり　木嶋　政治
卓球のごとき会話や夏近し　木村　夕里
ひるがへる猫のしつぽや冬うらら　柊野　妙子
とうさんはジャムパンが好き冬籠　杏　冬　夏
真っ青な空に溶けゆく山桜　久根口美智子
窯を出る陶の貫入今朝の冬　久根口美智子
葉脈も鼓動もひとつに新樹光　桑原　淑子
冬銀河大河は地球を巡る舟　桑原　淑子
白熱球暗し逃げ惑う金魚　小池　浩美
白足袋を繕ひし糸の白さかな　河野　悦子
穭田の天地澄みきり遠筑波　越川　三朝
吹かれゆく後ろ姿や十二月　小嶋　恵美
爆ぜてより揺るる榾火に膝を抱く　小嶋　恵美
逝く母に此の世の桜咲きにけり　小谷　一夫

被爆川此の世の蛍生みにけり　小谷　一夫
小走りに街尖り来る冬の来る　児玉リツ子
山下りてきし綿虫や日を恋うて　小西　國夫
部屋ごとに好きなことある夜長かな　小林　七重
襟立てて毀れかけたる地球行く　小原　緑
一条の光雪原あたたむる　小原　緑
身の置き所よき構図なり烏瓜　小安　章代
国道を挟む植田や風平ら　小安　章代
校庭の昼は賑やか帰り花　子安　啓司
散り残る紅葉に雲の近づきぬ　七種　萩子
身につかぬ物捨てるすべ暮れ早し　齋藤　義雄
抽斗のまるめろの香や稿仕上ぐ　坂　一草
夕空は蒔絵の如し冬木立　坂下　信子
螺子釘に額縁掛けし霜夜かな　坂本もと江
穴惑ひ蔓からまりし案内板　坂本もと江
横たはる破船のきしみ冬銀河　桜庭　恵
まくなぎや無人駅舎の時刻表　佐藤　豊子
紫の焔となりて菊逝けり　佐藤　正博
庭下駄のまだ濡れてをり茄子を挽ぐ　佐藤　美保
立冬や湯呑み両手に包み込む　佐藤　容子
滲みよき甲斐画仙紙や筆はじめ　佐野　明美
草むらの揺らぎ静めて虫時雨　佐野　無色

薄氷のした水平の泡ひとつ　塩田　修三
太陽のどの日傘にも一つづつ　塩見　成子
氏神の榾の残り火年の明け　志手　睦男
木洩れ日の大きくなりぬ朴落葉　篠原　弘子
マドラーをつまむ指美し聖樹の灯　篠原　弘子
何物も支へられない霜柱　篠原　枕流
初鴨の着水首を伸ばしきり　嶋治久美子
劇場のロビーの日差し虎落笛　島津　スミ
あくがるるひとの歩幅と春の川　清水　洋
山頂へ続く段畑島みかん　下田あつ子
菊人形胸ぬちいまだ蕾かな　白石　妙子
十二月八日の空に木の葉舞ふ　白石　千代
早起きの婆坪庭に茶摘みかな　城田　嘉三
春光のとどきて微笑木喰仏　神　繁雄
落つる時大き口開け石榴の実　菅野トモ子
何もかも一段落の冬田かな　菅原　孝子
吾病めり妻病む如し冬至来る　杉浦　守
街角の移動図書館薔薇香る　杉崎　淑子
短日や眉間けはしき人の波　鈴木美智子
霜解のまだ形ある草の上　鈴木美智子
マフラーやヴァスコ・ダ・ガマの航海図　砂川　節子
鮟鱇の上から剝がる五寸釘　角　達朗

日向には日向の匂ひ日向ぼこ　角　雅行
遠吠えに応ふ遠吠え寒月夜　角　雅行
医者嫌ひ薬嫌ひやちやんちやんこ　角　雅行
本の帯少し破れてゐる小春　関　雅己
赤き帆の海かたむけて暮るる秋　関　雅己
寄り合いて片栗の花一つづつ　関根　瞬泡
地震あとの更地の草も枯れ尽くす　園田　和子
地球儀の海の群青鳥渡る　高岡　幸子
餌を食む嘴の雫や冬日差　高倉　早苗
中庭のうすき日集め冬紅葉　高橋　純子
焦げ香るフレンチトースト冬の朝　高橋　純子
暮の秋どやどやと来て誕生日　高橋　正彦
山せまる戦火の如し秋夕焼　高橋　良明
秋晴れて海の匂いの駅につく　高松　眞弓
身構へて正論を吐く青蟷螂　高柳　ちゑ
補聴器が拾ふひびきや虫の声　武井　猛
鍵盤を叩くが如く若葉雨　武井　猛
奥入瀬の阿修羅の流れ紅葉映ゆ　武田　忠三
手際良く牡蠣むく漁師海光る　橘　孝男
風鳴りて冬の到来告げにけり　田所　咲子
音消えし大路の空や冬の月　田所　咲子
不揃に咲くや野菊の自己顕示　田中　阿以

殉教の城の石垣すみれ咲く　田中　強
淋しくて枯野は雲を引っ被る　田中　俊
木枯しに裁かるるごと吹かれけり　田中　俊
濃淡の霧にしづみぬ紀伊の山　田中　美月
山塊の闇濃き木立後の月　田中　美月
ふらここや兄妹すれ違ひすれ違ひ　谷口　一好
春水を塊で吐く河口堰　田村　清美
林檎むき円周率を思い出し　田村　利宣
口紅の緋の褪せゆけり冬の雨　田村美江子
春雷や加賀の山並目覚めたる　田村　峯子
夕凪や海割ってくる帰り船　多良間典男
火の神に冬至雑炊供へけり　多良間典男
草や木へ言葉のやうに春の風　鶴田ちしほ
海に立つビーナスのごと雲の峰　殿守　育子
牛鍋の座卓にそろふ膝小僧　富田　栄子
秋晴や令和が光る掲示板　戸村　伸
丁寧に畳む新聞年詰まる　友田　芙美
ふとこぼる言葉美し竜の玉　中川すなを
剪定や芝生に残る花鋏　中澤　泰三
常夜灯冴ゆる信濃の川堤　中島　利江
お顔なきマリヤの像や栗の落つ　中條今日子
点滴の時を刻むや冬銀河　中田　浩作

秋天へ縦回転の楕円球　中村　愛
曳く犬に引かれゆく老い秋の暮　仲屋　三造
避難所に射しくる月の白さかな　難波美枝子
目礼にかへす黙礼おぼろの夜　新堀　芳恵
大根引く跡ぽつかりと白き雲　西尾桃太郎
颱風や夜を探れる耳の穴　黒　子
目覚むるも暫し時雨の音とゐる　二田　紀子
綿虫に漂ふ力ありにけり　能田　孝昌
天高しサラブレッドの曲線美　萩原　豊彦
目線は三十階なり冬の月　萩原　渓人
北斎の藍色の如山眠る　羽田　孜子
小春日や新築中の木の香り　羽田　孜子
梅雨寒や目覚めぬ母を看て帰る　濱岡　学
虫売りの虫より上手く鳴きにけり　林　たかし
墓洗ふ亡夫（つま）洗ふやう丁寧に　林　寿子
竜の玉綺麗な村を夢とする　林原　敏夫
雪晴れの白一貫の村暮らし　林原　敏夫
どちらかが残る身となる寒椿　原田　熙恵
鳥の目に色は何色実千両　張替　和子
一途なる助走白鳥飛び立てり　引持　幸子
定年やなほゆるやかに日脚伸ぶ　久田　正己
しなやかに生きて七十路小鳥来る　深沢　頼子

鳥渡る地球が丸く見える岬　深谷　泰子
秋寂ぶる音はこれかも藁を積む　福井　英敏
囀りの中へ踏み込むスニーカー　福岡　園子
初鏡猫が家族の顔をせり　福田　泰江
都府楼の礎石と残る木守柿　藤波　則子
夕立の来るらし水のにほひして　藤村　啓子
枯蓮の折れて水面をゆすりけり　藤森　のり
妹に虫籠持たせ草の中　藤原　恋水
木の葉降る林の中の夕日影　別所　良彦
冬ざれの柱状節理波高し　保坂萌太郎
光凝る銀杏黄葉の爆ぜにけり　前島　康樹
枯蔓に絡む力の衰へず　益田満寿美
遠雷やへそ隠す子が窓閉めて　松井　恒夫
河川敷住む家のあり星月夜　松浦美智子
時雨来る外人墓地の鍵さびて　松田佐貴子
神籬（ひもろぎ）の鳥見失ふ初冠雪　松田　静枝
雁わたし縄文土器に耳ふたつ　松田　静枝
冬眠といふ選択肢欲しき夜　小川　竜胆
身の丈に生きていただく蕪汁　松本八重子
蓮の実の飛びて水面の空揺らぐ　丸本　圭
石狩の空が足りない真雁かな　萬年　和子
落葉踏む音近づきて遠ざかる　三木　節子

冬めくや緋の道行に仕付糸　嶺井　緑
草紅葉川面くらりと溯る　三橋　順子
北国にどすんどすんと冬来たる　宮内　信子
色鳥や巻頭となる俳誌来る　みやざき進
秋うらら古本市に子規の句集　宮本いずみ
雪吊や印半天風あふる　明　澄子
ほっこりと小豆汁食む百畳敷　明　澄子
冬夕焼貨物列車の長々と　三好　弘文
りんご箱代々継いで届きをり　三吉　昌子
秋の蝶ゆるりゆるりと羽ばたけり　向井　麻代
もう誰も遊んでくれぬ雪兎　椋本　望生
阿蘇五岳尾花を波として浮かぶ　村田　寛文
止めどなく山茶花咲くも零るるも　村橋　克雄
冬晴や鳥の図鑑をポケットに　森　悦子
抽斗を引くや団栗右往左往　森　啓
鵙鳴くや湯呑みに罅の入りけり　森　静子
図書館の貼紙多し文化の日　森　靖子
木の実ふる音まっすぐや石畳　森　靖子
桐一葉日の影落つる石畳　森川眞三子
夏草の犬の転げる窪みかな　八木澤　賞
雪降れば降る程近くなる夜空　八木澤　賞
冬ざれの山青ければ海蒼し　矢島　清

寒波来るロシア舟唄乗せて来る　矢島　清
農小屋の屋根にかたまり寒雀　安岡　房子
黄櫨染（こうろぜんきぬ）衣匂ひたつ秋の雨　山崎　千雪
山襞の深き集落蕎麦の花　山田　雅子
生涯を離れざる家冬木の芽　山之内喜七
秋高し薪割る音の跳ね返る　湯田　畊道
逆光に浮くしろがねの芒原　湯田　畊道
越後まで続く山脈冬銀河　湯田　畊道
菊枯るる刃こぼれの鎌研ぎにけり　湯田　畊道
秋灯平家を語る朱き唇　弓場　達二
廃屋に残る空瓶竹煮草　弓場　達二
客が来て二言三言秋の暮　横尾　浩
雪暗れや厠のあかり朝まで　横沢　秀典
神杉にがうと風音神還る　吉田かずや
母よりの最後の荷物初林檎　吉田　芳子
水ぬるむ母に私の居た時間　吉田　芳子
子規庵の座机や残る雪　吉村千枝子
春の雪払ふ音して女客　頼経　素風
仏蘭西語の通訳します雪女　渡辺千佐子
小鳥来て彫像ますますデフォルメす　渡邊　文子
……題詠「道」……
天道虫草間彌生を背負ひくる　赤繁　忠弘

木道を小さな飛蝗われに添ふ　赤嶺百合子

良寛の乞食の道冬枯るる　安積　邦夫

底冷えの墓所への道や野辺送り　阿部清流子

秋の海武帝来し道ありにけり　石川　明

小灯りに舗道のくすむ冬の雨　井上　宣孝

真つ直ぐな道白々と秋の暮　井上　幹彦

どんぐりや音符となりて屋根ならす　植木　修子

枯葉道前行く人と同じ音　梅澤　節子

好きな道どこまでも行く冬青空　蛯原　愛子

落葉踏む道は坂東札所へと　大寺千恵子

道ならぬ雪女郎の酌に酔ふ　大成　金吾

法隆寺出て法起寺へ柿の道　岡田　春人

雪道や夜空を走る流れ星　金森　鯉童

踏み出せば道の生まれる枯野かな　上紺屋葉月

山吹の色まねくごと風の道　亀井　洋

まつすぐな道まつすぐに行きて秋　川副　康孝

富士を見るさざなみ音の道涼し　川原　遊月

見送りの靴音消えて冬霞　河村　みな

どこまでが鎌倉古道草紅葉　草野　准子

劉生の道きらきらと五月来る　河野　悦子

道化師の寒き笑顔に喝采す　小嶋　恵美

此の道のつづく彼方も秋の暮　五所尾利男

下校子の道草けふも大花野　坂　一草

結ひ絶えし頃はいつ頃刈田道　坂下　成紘

柿たわわ立石寺への道の空　﨑谷　弘子

村内の寺の参道栗拾ふ　笹原　茂

俊寛の配流の道や鷹渡る　白男川孝仁

今日も寄り道からすうりと遊ぶ　鈴木　砂紅

ほろ酔ひの父に負はれし月の道　瀬尾とし江

道の辺の稲架のほてりや夜匂う　関口ひろ子

沿道に草刈る人のナルシズム　高橋　千鍾

寒椿父の通りし道眩し　髙林　信二

野水仙生家に近き田んぼ道　竹田　清美

もみじ葉の火伏の道に佇ちにけり　田中　悦子

影もたぬ一本道や赤のまま　谷口　智鏡

道半ば逝きしが君よ蛍火よ　為成　央子

うららかや曲がりたくなる曲がり道　塚本　治彦

冬ざれのふさ道に聞くよいとまけ　鶴岡十詩生

年の瀬や女人の混じる道普請　飛田キミ子

自転車の僧衣ひらひら稲田道　長岡　和恵

夕虹や下山ルートを過たず　中澤　泰三

おくれゆく熊野古道や時鳥　永島　文江

炎暑の道ぐにゃりと見ゆる水を飲む　中村美智子

天空へ糸伸びてゐる凧の道　成瀬　貢

凍凪や五畿七道の北の果て　西井　健治

山寺の道は石段望の月　西川　草笛

獣道見えて一筋月光裡　西川　安子

枝付きの柿も並べて道の駅　西村　久子

棟の実中山道にこぼれ落ち　西山　玲子

黄落や道掃く人の背のまろし　服部　正遊

鮟鱇の七つ道具となりて果つ　樋口　昇る

戦あるなと冬田道歩くなり　平見　翠玉

木洩日に黒百合臭ふ獣道　廣瀬　和男

非核への道のり遠い原爆日　福田　尚義

迷走か思ひ通りか蜷の道　藤根　豊

夕凪の尾道の鐘渡りけり　前島　康樹

雪晴の道まつすぐに続きけり　三浦　和代

振り向けば早や道となる雪の国　美濃部紘三

韻律を足裏つたふる枯葉道　宮下満寿美

蒼天の点膨らみて鷹の道　武藤　三山

粉雪の風と流るる煉瓦道　村田　牧美

筑波山入道雲が腰かける　山口　勝己

輝きし芒峠の道しるべ　山中　資治

菊田一平選

特選

今生の禍福たつぷりちやんちやんこ　福岡　髙橋千恵

このところダウンやフリースに押されて「ちやんちやんこ」を見ることはなくなったけれど、ひと頃は冬の必需品だった。句からはちゃんちゃんこを着た人の性別は分からないが、心の福々しさは十分に伝わってくる。中七の「禍福たつぷり」に作者の視線の温かさを感じることができる。

青みかん我が晩学の四畳半　兵庫　菱野としみ

日本人の平均寿命は、男性が81・09歳、女性が87・26歳に達した。この平均寿命は医療技術の目覚ましい発展によってさらに伸びることが予想されるらしい。作者は四畳半の書斎で黙々と何かに取り組んでいる。季語の「青みかん」が、晩学への心の弾みぐあいを存分に伝えている。

……題詠「道」……

道おしえ父母のお墓で見失う　福島　遠坂洋子

「道おしえ」について「父母のお墓へ行った」では平凡な句で終ってしまう。「見失う」としたところがこの句の上手さ。あたかもお墓のあたりでふっと消えたように居なくなった「道おしえ」が、作者をお墓へと呼んだ父と母の魂のようにも思えてドラマチック。省略の効いたいい句だ。

秀作

しぐるるや敦の駅の西東　東京　吉田かずや
軍服の横に春着の母十九　北海道　小池浩美
ほほづきを鳴らし少女にもどる妻　千葉　丸本圭
きつね火を語る父の目童の目　東京　加藤照枝
庭石となりし石臼ちちろ鳴く　福井　柄谷せつ
かるたとり妹負けず嫌ひかも　愛知　太田かつ子
ダム底に村の石垣渇水期　三重　浜西修
木の葉髪ジャズのリズムに指鳴らす　福島　西村富子
躓きの僅かな段差日雷　北海道　新谷辰雄
虫売りの虫より上手く鳴きにけり　東京　林たかし
どちらかが残る身となる寒椿　愛知　原田熙恵
もう誰も遊んでくれぬ雪兎　大阪　椋本望生
くさめひとつふたつみつよつ妻は喜寿　石川　前九疑
一年の未練も煤も払ひけり　千葉　新井和生
空爆のような豪雨や敗戦日　埼玉　朝川晴也
かまくらや隣人として孫の声　福島　前田善助
冬銀河子に反骨の喉ぼとけ　埼玉　梅田ひろし
レコードに針を落して昭和の日　兵庫　長井良孝
母の寝ることなき布団干しにけり　群馬　細野彩扇
いくそたび行きつ戻りつ花の下　福岡　井口冨士夫

……題詠「道」……

寒風や目尻の涙道づれに　神奈川　柳原さわ代
踏み出せば道の生まれる枯野かな　大阪　上紺屋葉月
枯葉舞ふこの道行けるところまで　神奈川　山田蹴人
満月へ続くこの道ペダル漕ぐ　岐阜　松原敏子
獣道冱ててぬたばの荒々と　三重　増田笑子

〈佳　作〉

掲載は氏名五十音順です。

煮て焼いて生で三食初秋刀魚　赤繁　忠弘
百年の一炊の夢冬至粥　秋元　虹雪
燕来る父が燕になつて来る　秋山　観水
そうだった私の恋も青蜜柑　阿久津利江
花吹雪あびつつ通る車椅子　新井　忠彦
子を待ちて大つごもりの灯は消さず　安藤　玲子
忘却の父母の戒名水の秋　池谷　硬司
猫の恋町中に知れ渡りけり　池田勝のり
千両の一両づつの雨しづく　池田　綏静
七五三仕度の出来ておちょぼ口　石井　信子
放たれて身震ひ一つ狩の犬　石松　禎佑
豆飯やいろはにほへと皆傘寿　石松　禎佑
吾なりに充たすくらしや茸めし　市川　東子
夏つばめ鍵をかけずにゆふべ来る　市村　栄理
着ぶくれてだるまのやうな翁かな　井藤　茂雄
満月やどこかで窓を開ける音　伊藤　忠
スーパーのちらし広げて日向ぼこ　井上由美子
廃坑の高き煙突月まどか　井口冨士夫
秋の暮母の寝言に亡父の名が　井原　文江
短日のカーブミラーに夕日かな　茨木由己子

水桶の水なみなみと神の留守　今井　哲也
冬至湯に顎までつかり父似かな　筑紫　太郎
ねんねこを縫ひしは母が最後かも　今村　直子
追儺会の舞台組みをる新勝寺　岩田　勝
追憶も今もいじめに会う寒さ　岩坪　英子
一人居の一人で雪を掻く覚悟　岩水　節子
虫干や生きた証の粗相痕　印出井慶子
豚汁を作り置きして年の暮れ　印出井慶子
信心を一打に込めて十日夜　植木　英雄
菊人形着替え再び武士となる　植松　節子
冬銀河しみじみ仰ぐ通夜の空　榎本　節子
塩こしよう定位置にある無月かな　蛯原　愛子
天高し父のつかいし杖をつく　大池　一人
隣り合ふ人も旅人秋日和　大石　坦
古日記介護の日々の母の顔　大木　和親
目つむりて春猫耳を使ひをり　大久保一彦
目に残る母の猫背の夜なべかな　大島　糸子
万緑や宮千年の大銀杏　太田　正之
小豆粥すぐに厨の曇りたる　大成　金吾
穏やかな智恵子の郷の菊人形　大沼　卓郎

着ぶくれが着ぶくれ笑ふ大鏡　大野みよ子
からからと音を繋げて蓮の骨　岡　まゆみ
嵩厚くなりたる手帳年暮るる　岡田　康裕
老二人免許返納秋刀魚焼く　小口　静江
猪狩りの無線ひづめの向き知らす　尾崎恵美子
クレヨンに昭和の香り山粧ふ　掛村おさむ
大潟村の大型重機豊の秋　片岡　嘉幸
歩み出す二十歳を祝うぼたん雪　片倉　音訪
遠目にも聖誕祭の街明り　加藤　順子
薄氷を割つて青空出しにけり　加藤　浩
邂逅の恋の余熱をおでん酒　金澤　一水
百日の雪との暮らし始まりぬ　金子　照栄
除夜の鐘昭和平成遠ざかる　金子　照栄
笑はんと頬の強張る寒さかな　金子　熙
耿耿と棚田千枚月せんこ　金谷　保
見学者数多はべらし雪吊す　上内　義則
身に入むや家系といふは病にも　川副　康孝
流鏑馬の馬も祓ひて秋祭　川辺　谷平
冬ぬくし母の便りに誤字一つ　木嶋　政治
ケセラセラ母のはな歌年暮るる　北島　孝子

自適とは時に孤独や花八手　木津　和典
更地には更地の歴史いわし雲　木原　登
角と角闘志満満兜虫　君塚　房子
即位礼富士が祝福雪化粧　木山征四郎
野に返る故郷の景や柿の秋　久我富士枝
襟巻を結び直して風の街　久呉　道子
針箱に秘め事めいて寒の紅　杏　冬　夏
新涼や寝ころんで読む一茶の句　久保　厚夫
秋日和子の散髪の出来上る　久保田敏子
虫の音が消えて雨音風の音　倉持　正紀
風の子の念力失せて風邪籠　郡司　紀子
逝く母に此の世の桜咲きにけり　小谷　一夫
硝子越し師走の月を磨きけり　小谷　一夫
いち早く風を捉へし男郎花　小塚　青楓
鶏絞めて囲む七輪年忘れ　小塚　信江
砂時計また逆さにし春を待つ　後藤　史子
麗かや雲を眼下に空の旅　小林志津江
運針の指穏やかに初月夜　小林　智湖
即興の台詞大受け村芝居　小林　七重
校庭の昼は賑やか帰り花　子安　啓司
地球儀の海のきらめき冬日射す　七種　年男
家族集へり一本の庭の柿　齊藤　智子

さっぱりと枝打ちされて十二月　坂井　正巳
冬薔薇の芽のやはらかし陽に赤し　坂口　和代
秋深し拭いて小さき母の顔　佐々木希世有
遠き日の凧は長押に子は父に　佐澤　俊子
獅子舞に頭かまれて泣く子かな　佐藤　聡
滲みよき甲斐画仙紙や筆はじめ　佐野　明美
補聴器に会話弾めり日向ぼこ　佐野　延子
花吹雪鉤の手多き城下町　座間　英幸
子の帰宅待ち居る夜の炬燵かな　閑　日出夫
絵屏風の虎に泣き出す幼児かな　島村　實
古街のここも空き家よ金木犀　下浦ひろむ
山頂へ続く段畑島みかん　下田あつ子
何もかも一間で足りる老いの冬　白石　三恵
耳遠き妻よ新年おめでたう　代田　雅文
道訪いて道づれと成る島遍路　神野　園子
故郷は近くて遠し菊なます　須崎　輝男
呼ばずとも膝に乗る猫日記果つ　鈴木　武
鉄棒の連続回り天高し　スズキユミコ
蹴り上ぐる加賀の御空や梯子乗　瀬川　惠
鳥雲に何と世間の小さきこと　関根　瞬泡
風に飛ぶ枯葉気ままに一人旅　髙橋　輝子
冬木立間伐材はピザの薪　髙橋　トシ

克明な昭和の日記曝しけり　髙橋マキ子
母郷去り難しかなかな鳴けばなほ　高原　純徳
山ざくら仁王のゐない仁王門　高原　晴子
雲一つ浮かべて秋の暮にけり　田口　朗子
あの時と同じ服着て菊の道　田口　朗子
アナ雪と居たとインフルエンザの子　田口　和司
神官の礼深々と山開き　武井　猛
五日はや歯医者の椅子に口をあけ　武市　宣子
束の間の子等の沈黙鵙の贄　竹田　清美
秋薊雲の流れの早かりき　武田　ミツ
襟ぐりのゆるぶTシャツ涼新た　鷺　汀
黙々とロープ巻き取る祭あと　舘野　茂子
手相見の小さき明りや雪催　舘野　茂子
文化の日足見えてゐる試着室　田中　ゆず
切干しの日向の匂ひ裏返す　田中哲山人
もぐ人の無くて明るきみかん山　田中　俊
淋しくて枯野は雲を引っ被る　種ヶ嶋美節
身の丈の高さに結ぶ初みくじ　田村美江子
義士の日や父に酒豪の顔ありき　為成　央子
割烹着美人と言はれ天高し　多良間典男
屋根獅子の台風睨み返しけり　千葉アツ子
門前町どの家も柚のたわわなり

亡き母の部屋広びろと秋簾　千原　道子
引き算の日々を師走の雑踏に　津田　京子
寒鰤の糶りや高値に溜息す　鐵　福夫
ちやんづけで呼び合ふ二人ベレー帽　照井　定子
アレグロの川のせせらぎ黒揚羽　鳥井　展石
子ら集ふ日や大鍋におでん煮る　内藤こと代
冬ぬくしハングル文字の神籤枝に　長岡　和恵
大仰に見栄きり吼ゆる祭獅子　中込　儀一
捨てられし葉の山にほふ生姜市　中島たけ子
火祭の闇に控へし消防車　中野　硯池
ポケットに持薬たしかめ冬初め　仲村　輝夫
殿様も道具を運ぶ村芝居　中本きみよ
終章を飾る鳴きごゑ秋の蟬　中山　幸子
走る野火とどまる野火や草千里　中山　秀子
若き日の詩集の折目冬薔薇　鳴海ふく江
冷まじや膚に刺さる鍼の数　新津　富子
寒椿昔激しき恋をして　新津　黎子
目礼にかへす黙礼おぼろの夜　新堀　芳惠
ふくろふに聞け白頭をひねる術　西井　健治
きのふ雨けふは霙の山陰路　西尾　青雨
秩父一揆のことも遥かや後の月　西野　敏子
老いの秋今日のルージュの色決める　西村　久子

花祭兄在りし日の腕相撲　西山　玲子
小鳥来る十一階に住む暮し　西山　玲子
夏果てぬ旅の雑誌は鍋敷きに　額田　昌安
もんじゃ焼きヘラで掬いて年忘　額田　昌安
綿虫に漂ふ力ありにけり　能田　孝昌
獅子舞の大きな口へ祝儀かな　能田　孝昌
日向ぼこ母そつくりの座り方　野口　圭市
百までは生きる顔して注連を綯ふ　野口　久子
山笑ふけふ解放の取水堰　野尻　瑞枝
さくらちるだあれもいないブランコに　のむらつゆこ
転生の夫の綿虫われに寄る　橋本　久子
ハリ薬はり合ふ老いの秋の暮　長谷川京子
亡き人の秘密に触れし盂蘭盆会　羽立　和子
おとなしくなればゐねむり十夜婆　畠中　俊美
小春日や日に二本てふバスに揺れ　波多野富代子
クローバー摘みて子と編むネックレス　華園　もと
襤褸市へ行く蟇口をふところに　浜田はるみ
窓越しに鵯の目と合ふ冬日和　阪東　静子
手の先に若さ残れる盆踊り　樋口　雄二
麦を蒔く活断層の上に住み　人見　正
丹頂の命の声を交はし合ふ　平井　萌黎
たんぽぽや童となりし母の笑み　平尾美智男

啄木鳥や生業の音木霊する　廣瀬　猛士
篝火を手に手に波へ海女祭り　深谷　泰子
初鏡猫が家族の顔をせり　福田　泰江
病棟の窓越しに見る秋時雨　藤田　鈴子
八十はまだ序の口や老の春　藤根　豊
吾が影と春満月の無人駅　舩津　信子
開拓百年祭いかづちの祝電　文梨　弘子
三井寺の強訴の如き大くさめ　保坂萌太郎
表札も個人情報霧深し　細谷水無子
ペンギンの柵魚臭きすきま風　前畠　一博
色かへぬ松と水面の金閣寺　正木羽後子
遠雷やへそ隠す子が窓閉めて　松井　恒夫
人げんにマイナンバーや原爆忌　松浦美智子
夫の声とどくあたりに蕨折る　松尾　一子
くだら野を過ぎてふるさと光射す　松川　洋酔
雁わたし縄文土器に耳ふたつ　松田　静枝
みちのくの風が極める凍み豆腐　松見喜美子
道草も遠き思い出れんげ草　松本登志子
身の丈に生きていただく蕪汁　松本八重子
一人居の炬燵机に食卓に　三浦　貞葉
しゃんしゃんと運気も上がれ酉の市　三田さちこ
介護士の仮眠勤労感謝の日　三井　和子

馬乳酒を交わす草原星月夜　三津木俊幸
疎みつつ恋ふる故郷秋夕焼　光榮　裕
村芝居果てて荷を積む秋の暮　三宅　美芳
子の夢を聞いて楽しき月夜かな　宮﨑句美子
青春を子猫に語り日向ぼこ　宮崎タエ子
靴紐にいつのものともゐのこづち　宮野　栄子
武甲嶺や新酒の頃を稽古笛　村田　寛文
さ湯に溶く子犬のミルク雪もよひ　毛利　喜子
芋嵐皺む夫の手私の手　毛利　律子
風邪癒えて忽ち利かん気の子なり　望月　清彦
冬晴や鳥の図鑑をポケットに　森　悦子
亡き母の一間に残る古暦　森　加名恵
信号のカツコウと鳴る小春かな　森　静子
冬帝の祝意ティアラを輝かす　森田　英子
夕映えがぎっしり詰まる枯木立　安井　武
修験者の通夜に法螺貝秋夕焼　山岸　滋子
湯気吹いて元気家族の根深汁　山口　富雄
ひぐらしや絵本を胸に子の寝息　山口美由喜
むかご飯牛のせり市近づけり　山下　守
ほぐしたき宝いろいろ大熊手　山田　道代
啓蟄の水の飛び出すホースかな　山中　順子
秋草や石を吊り上げ墓仕舞ひ　山中　節子

草取の軍手を洗ひ終りけり　山野　節子
濁流は地球の臭ひそぞろ寒　山之内喜七
茎太し祖母の手しおの冬薔薇　山本眞名井
捨てて来し村まんさくの咲く頃ぞ　湯田　畊道
逆光に浮くしろがねの芒原　湯田　畊道
八十八夜開く手擦れの農日誌　湯田　畊道
廃屋に残る空瓶竹煮草　弓場　達二
借景と言ふには大き山眠る　横山　洋子
捨案山子なほピストルを撃つ構へ　吉田　晃延
大戦に生きて令和の初明り　吉武　千束
炉話のやさしく聞きし京言葉　吉積　漫歩
小さき子の父と杵つく餅の音　吉野　幸治
難事切り抜け大望の新走り　吉野利美子
春の雪払ふ音して女客　頼経　素風
一対の蛍一樹へまつしぐら　若井莅津子
軽やかにマーチ過ぎ行く立夏かな　鷲澤　直樹
古刹には古刹の香り冬ぬくし　渡辺　一甫
仏蘭西語の通訳します雪女　渡辺千佐子
囀りの中やあさげのテーブルは　渡邊　文子

……題詠「道」……

先見えて急ぐことなき枯木道　相原　一枝
尾道の坂は迷路や猫の恋　秋山　観水

天道虫結び目固きボッカの荷　朝倉𡚁代子
コンビニの灯りが救ひ凍夜道　井川　水衛
時雨るるや熊野古道も野仏も　印出井慶子
春雷や道路工事の手が止まる　内山えいじ
現の証拠はや一群の野道なる　太田　正之
天道虫向く方に向く閻魔の眼　大村　豊子
ただ歩くだけの日課や青田道　奥山　功
雪道を転がるやうに通ひけり　小俣　敦美
ビル街を辿りべつたら市へかな　各務千枝子
隧道は通行禁止冬苺　加藤　政美
猪の荒らせし道を跨ぎ越す　加藤　佑子
滴りや熊野古道は輿の幅　川口　和子
山茶花やむかし逢瀬はこの辺り　河原　昭子
初蟬や夫見舞ひたる日暮道　神戸恵美子
一病も終の道連れいわし雲　木津　和典
道連れとなりて良夜の影法師　小柴　智子
天の句に少しの異論良夜道　小畑　定弘
鳥渡る中州は風の通り道　木幡　嘉子
個性誉め花丸贈る卒園日　小林　寛久
掛額に道の一字や牛鍋屋　小林　道子
信玄の軍用道路茸狩　五味　久子
山眠る窯場に続く道細し　小室けい子

夫と娘の来てすぐ戻る盆の道　小山惠津子
終日の俳句道楽文化の日　齋藤　義雄
植木屋の腰にラジオや雲の峰　酒井　明子
秋晴れや甲賀伊賀越え忍者道　澤　長寿
花道は地下足袋ロード田草取り　清水　昭八
職退いて妻にしたがふ萩の径　代田　雅文
お遍路の後や先して道をしへ　城山　憲三
旧街道梨売る婆の膝に猫　神保ミツエ
今日も寄り道からすうりと遊ぶ　鈴木　砂紅
生きてきし道の確かに古暦　高橋　純子
夕焼けの夕日写して道路鏡　高橋　武子
ゆっくりと歩む終章昭和の日　高橋マキ子
寒椿父の通りし道眩し　高林　信二
古墳へと道まつすぐや鵙日和　田上　勝清
亡き父の思ひあふれる冬田道　高山美津子
天城路やいつか綿虫道づれに　田中哲山人
うららかや曲がりたくなる曲がり道　塚本　治彦
坂道は橇の遊び場昭和の子　中島　みつ
道場の百畳走る隙間風　鳴海ふく江
暮れなづむ町の斑雪をしやりしやりと　黒　子
枝付きの柿も並べて道の駅　西村　久子
粗食ひの樹の実ちらばる深山道　橋本　菊乃

畦道に猫車据ゑ大根干　畠中　俊美
村中の春を並べる道の駅　羽矢　眞人
日向ぼこ道ゆく人を手招きし　坂東　文子
茶の花や蕊伝道の灯とも　平野　哲斎
手掘り跡残る隧道秋の冷　平松　公代
紅葉せる奥の細道結びの地　廣瀬あや子
黄泉路まで少し道草日向ぼこ　藤根　豊
道普請共に移動の焚火缶　古川よし秋
街へ行く道一本や深雪村　星野　光子
道を説く友の白髪や濁り酒　増田　幸弘
父に逢ふ菩提寺の道枇杷の花　松岡　美子
岐れ道ばかりだつたと生身魂　松本　逸朗
黄帽子の浮き沈みして花野行　馬渡　清蔵
雪晴の道まつすぐに続きけり　三浦　和代
この道のやがて十字路芋嵐　道口　育子
露店の灯ともる参道除夜詣　宮岡　弘
寄り道はいつものパン屋小鳥来る　宮田　一代
道具屋の卒寿の鬚や冬うらら　宮坪　勝美
立飲みの酒肆の裏道星涼し　桃原　晴美
道行きや御捻りの飛ぶ村芝居　山口　勝
父の背の小さくなりし落葉道　山下あゆみ
いくたびも倒木潜る登山道　吉村　賢次

霧といふ大ふところへ旅のバス　吉村千枝子
走り梅雨魚道をのぼる魚の影　米倉　和美

嶋田麻紀選

【特選】

百年の一炊の夢冬至粥　埼玉　秋元虹雪

冬至は一年中で昼が最も短い。災厄を払うため、この日には粥に南瓜を入れて食べる習慣がある。健康に良いとされる食べ物でもあるが、人生百年とうたわれる今日でも、人生の栄枯盛衰のはかなさと同じく、冬至粥を食べたからといってどうなるものでもなかろうと思いつついただく。

地下道より羽化するごとき日傘かな　埼玉　小田原やちよ

地下道から地上に出てくるとき開かれる日傘は、反対側の道路などからみると、人間が白く羽化するようにみえるという発見。何かが動いていると意識して見ると、くらげの傘のようにふわりと日傘が浮いてきて、人間が地上に現れる。その不思議な空間を切りとって面白く読める句。

……題詠「道」……

黄泉路まで少し道草日向ぼこ　岐阜　藤根　豊

生きとし生ける物、すべてはいずれ死ぬ運命、あの世へと旅立つ。死後、黄泉路から戻った人は居ないから彼の世のことはわからない。人生いずれ終るのだから、今は少し道草かも知れないが、日向ぼこでもたのしむことにしましょう。ぼーっと生きるのも捨てたものでもないのでは？

【秀作】

空蟬の琥珀色なる記憶かな　千葉　都丸浩美
引く力踏ん張る力草むしり　福岡　金子佳子
産声に男の子のちから雲の峰　福岡　垣内　薫
潜(かつぎ)ても浮きても濡れて雨の鳰　兵庫　名越紫音
風に刃のあるとも見えず破芭蕉　大阪　奥中和子
放たれて身震ひ一つ狩の犬　福岡　石松禎佑
釣りし黒鯛(ちぬ)怒り秘めたる背鰭かな　和歌山　亀井　洋
ボンネットに束の間の客雀の子　福岡　藤井和子
靴紐にいつのものともゐのこづち　鹿児島　宮野栄子
はつかなる光分けあふ花八手　神奈川　百田登起枝
五百年漢方鬻ぐ箱火鉢　大阪　畠中俊美
人込みを避け人込みに入る秋思　千葉　日光正春
手の届く所に淡き返り花　岡山　杜　弘景
避難所に射しくる月の白さかな　東京　難波美枝子
冬ざれの柱状節理波高し　埼玉　保坂萌太郎
葱束のきゆきゆと鳴るや猫車　宮城　佐々木希世有
嵐去り吃水線のゴミの帯　茨城　山口勝己
革張の日葡辞典や南吹く　愛知　清水良郎
フラスコの光柔らか春兆す　神奈川　竹見かぐや
たゆたうて時をつかへる海月かな　広島　日比野さき枝

……題詠「道」……

杖置きて秩父古道に汗拭ふ　埼玉　鳴滝暁
参道に刃物市立つ春祭　埼玉　武井猛
道行きや御捻りの飛ぶ村芝居　愛知　山口勝
新涼やここが我が家の風の道　埼玉　武井猛
山道が即参道や初景色　東京　金子熙

【佳　作】

掲載は氏名五十音順です。

白狐舞ふたびに山車揺れ里祭　相沢正志斎
金目鯛水揚げしたる波飛沫　赤瀬川恵実
切り通し緋の移りゆく曼珠沙華　赤嶺百合子
久々のお国訛や菊膾　秋山　常雄
ランドセル背中に踊る春の夢　麻生　昇平
七五三妹励ます兄五歳　足立　和隆
賀状書く運筆いまだ衰えず　熱田　親憙
船頭は一寸法師か花筏　荒井　古鷹
花吹雪あびつつ通る車椅子　新井　忠彦
磯宮の磴の険しや海桐の実　安藤　鋭子
子を待ちて大つごもりの灯は消さず　安藤　玲子
藁くずに流れを残し水澄めり　飯田　真二
肉ばかり拾つて食ひて生身魂　井口　光雄
忘却の父母の戒名水の秋　池谷　硬司
春の野の四方を睨む養蜂家　池田勝のり
指さしてゐて綿虫を見失ふ　伊佐治秀一
日向ぼこ地蔵の帽子編みにけり　石川アキ子
艫綱の伸びて弛みて秋麗　石川　明
うづ堆き枯葉にひらり枯葉散る　石川婦美子
母の亡き嬰児の重湯虎落笛　石田　欣一
大皿を一枚買ひて年用意　石橋　徹生
万の向日葵焦がす地球の温暖化　石村　流翠
吾なりに充たすくらしや茸めし　市川　東子
馬糞海胆足で櫓を漕ぐ漁師かな　伊藤　茂子
時雨るるや妣の履癖残る下駄　井上　千秋
庭先に夕日残りて草の花　井口冨士夫
短日のカーブミラーに夕日かな　茨木由己子
万緑のバンジージャンプ癌手術　岩﨑　幸邦
村芝居夕焼舞台にさし込んで　岩﨑　昌子
戦国の物見櫓や冬の鳶　宇佐美和子
すつきりと飛行機雲の伸びて秋　牛久保悦子
寒の入気概を放つ豆剣士　大坂　和子
惜別や目深にかぶる冬帽子　太田　和志
万緑や宮千年の大銀杏　太田　正之
着ぶくれが着ぶくれ笑ふ大鏡　大野みよ子
桜島の大根でんと朝の市　大平　政弘
命綱千木より貰ひ雪降ろし　岡崎　健風
池普請群れ鳥栖失へり　岡田　有峰
冬ぬくし人を拒まぬ自動ドア　岡田　邦男
やはらかき旅の鞄や草の絮　岡田　春人
嵩厚くなりたる手帳年暮るる　岡田　康裕
口嗽ぐ水より秋の立ちにけり　奥山　功
猪追ひて戻らぬ犬を呼ぶ谺　尾崎恵美子
廃校も空家もありて山粧ふ　小田原やちよ
逆る水峡に聞き天の川　梶原　末登
ぬつと出る思はぬ足や稲架襖　片上　強
長旅を終へて安堵の浮寝鳥　勝部　豊子
薄氷を割つて青空出しにけり　加藤　浩
ハープ橋奏でるやうに夏燕　金子　絹子
笑はんと頬の強張る寒さかな　金子　熙
解かれたる老老介護虫しぐれ　金子まもる
庭石となりし石臼ちちろ鳴く　柄谷　せつ
信頼の二文字の重さ薄氷　河井　功夫
山峡に煙ひとすぢ秋収め　岸　さなえ
兄の意地負けるものかと独楽廻し　木地　順子
冬ぬくし母の便りに誤字一つ　木嶋　政治
車窓へと迫りし雪の伊吹山　北　貞子
考への決まらず一枝足す焚火　北橋　晁子
茶の花をこぼし明るき阿弥陀坂　北村　薫
空高く飛び囀りに加はらず　北村タカ子

遺跡とふただ露結ぶ石なりし　木津　和典
折鶴の再生名刺広島忌　君塚　房子
卓球のごとき会話や夏近し　木村　夕里
空を向く丹頂誰に呼ばるるか　木村　佑
冬苺我と仏に供へらる　久呉　道子
大粒のわけても真つ赤冬苺　草野　准子
針箱に秘め事めいて寒の紅　杏　冬夏
今生は悲喜相半ば夢二の忌　國井免独斉
窯を出る陶の貫入今朝の冬　久根口美智子
里山に子と拾いけり落とし角　福丸　みつ
志一途にありて松の芯　源通　清信
義士の日のあつあつ蕎麦を啜りけり　小島　紅雅
雪籠畳廊下を踏みしめて　小島　紅雅
野の池の止めどなく吸ふ夕霙　小島　政子
叩く時たたら踏みけり土竜打　小谷　一夫
逝く母に此の世の桜咲きにけり　小谷　一夫
折鶴を入るる柩や原爆忌　小谷　一夫
ポケットに両手遊ばす余寒かな　きむらあきこ
八時間寝足る勤労感謝の日　後藤美智子
月冴ゆる原発事故の廃気筒　五ノ井研朗
春浅し腹にずしりとサクソフォン　小林　英樹
諍へど一家の囲む煮大根　小松　一郎

競漕の身を倒しきるところまで　小松　光希
白き瀬や鵜の喉袋ふるふると　小松　光希
浜茹での蟹の湯気たつドラム缶　近藤　英明
ベビーカーを小さく畳む冬仕度　斎藤ひでを
出棺の警笛長し秋の霜　坂本　吟遊
玉子酒十人分の女正月　崎田　定雄
とねりこの花淡淡と明易し　佐藤　梅代
庭下駄のまだ濡れてをり茄子を捥ぐ　佐藤　美保
回覧板だけの行き来や秋桜　実沢　愛子
青田風光が囲む一軒家　佐野　無色
夏草や油田名残りの黒い池　佐保田全弘
瓜坊の堅き毛並や草紅葉　塩谷　民子
馬留の朽ちた街道神の旅　四島　幸子
木洩れ日の大きくなりぬ朴落葉　篠原　弘子
投網打つ冬夕焼の直中へ　芝田　太
鴛鴦を端から数ふまた数ふ　芝田　太
糸口の見付からぬまま雨水かな　芝田　太
楽譜なき母の軍歌やちちろ鳴く　嶋治久美子
耳に痛き母の小言や酬し柿　清水須寿代
休耕地余すとこ無き犬ふぐり　城島　珠恵
萍の遊ぶや五稜郭の池　菅谷　貞夫
街角の移動図書館薔薇香る　杉﨑　淑子

熱燗に溶けこむ御国訛かな　須崎　輝男
歯っ欠けと呼べぬ子となり休暇果つ　鈴木　計廣
秋風をまとひ民生委員立つ　須田　隆
医者嫌ひ薬嫌ひやちやんちやんこ　角　雅行
蹴り上ぐる加賀の御空や梯子乗　瀬川　惠
「ご自由に」と避難所にある紙懐炉　関　美奈子
からつ風阿蘇の噴煙よく見ゆる　園田　和子
レコードのジャケット褪せるレノンの忌　高石まゆみ
地球儀の海の群青鳥渡る　高岡　幸子
買出しの自転車急ぐ野分前　高崎　雅明
杓文字もて待てる田の神豊の秋　高原　純徳
草萌や仔山羊の耳は日に透きて　高原　晴子
海胆を割く老斑の掌のたしかなる　高本よしえ
緑立つ吾子の働く姿かな　竹下　和宏
シクラメンもつとも燃ゆるを身ほとりに　竹下　澄子
束の間の子等の沈黙鵙の贄　竹田　清美
寝冷子の癖毛のままの正座かな　竹田しのぶ
紅葉濃し峡の一庵歩を誘ふ　田島　貞子
堂めぐる白砂の文目初雀　田島　貞子
けふからは白髪を染めず草の花　鷺　汀
黙々とロープ巻き取る祭あと　鷺　汀
蛍袋覗けば苦き恋の屑　鷺　汀

冬うらら教皇の手のやはらかき　鷺　汀
手相見の小さき明りや雪催　舘野　茂子
葱汁のあつきを啜る去来の忌　井出　悦子
音消えし大路の空や冬の月　田所　咲子
奈落とふ涼しき処芝居小屋　田中テル子
北海の漁師一喝羆去る　田中美紀子
吊されし赤い手ぶくろ無人駅　谷　和子
身の丈の高さに結ぶ初みくじ　種ヶ嶋美節
一点の雲なき空や花梯梧　多良間典男
断捨離に古手紙読む夜長かな　千葉　実
亡き母の部屋広びろと秋簾　千原　道子
時雨るるや赤き怒髪の四天王　千原　道子
大根を一本さげて新居訪ふ　塚田久仁栄
緩和病棟静かに春の日のなかに　津田　隆
蟬落つるかすかなる音爆心地　露木　伸作
黄櫨染（こうろぜん）御袍が映ゆる白障子　出店智恵呼
綿虫や古き長屋の残る路地　土井美恵子
毛虫つぶす「ちょうになるのに」大泣きす　戸田　絢子
どの部屋も布団干しあるケアハウス　飛田キミ子
バス待ちの吾の足下陽炎へる　戸村　伸
気嵐の先の立山初日かな　中沖　稔
ゆるゆると残暑纏へる観覧車　中澤　泰三

尺寸の這うてうねってむかで凧　中島　啓介
冬浪のしぶく岩屋にマリア像　中野　弥生
細脛に四股踏む子らや柿若葉　中村　敬
殿様も道具を運ぶ村芝居　中本きみよ
冷まじや膚（はだえ）に刺さる鍼の数　新津　富子
空耳の中に母なる秋の声　西村　久子
俎板のリズム乱せる冬の雷　西村　久子
小鳥来る十一階に住む暮し　西山　玲子
もんじゃ焼きヘラで掬いて年忘　額田　昌安
綿虫に漂ふ力ありにけり　能田　孝昌
青空に雲一つなく帰り花　野田　彰子
胸奥の箍をゆるめて柚子湯かな　野村　瑠以
爽やかや鐘澄む島の天主堂　萩原　豊彦
燕くる開けっ放しの農具小屋　橋本　菊乃
小春凪揺れつ此方向く舫ひ船　橋本しげこ
ハリ薬はり合ふ老いの秋の暮　長谷川京子
蝸舎ぐらし何は無くても小鳥来る　花塚クニオ
長き夜のひとり遊びの一句かな　馬場　弥生
千年の大樹の下や飾売　浜田はるみ
白山の薄化粧して神迎　東　洸陽
藻屑蟹一斗缶より遁走す　引持　幸子
新幹線一閃雪の富士を薙ぎ　樋口　雄二

咲き満ちて足に触れたる萩の花　彦坂　綾子
青みかん我が晩学の四畳半　菱野としみ
しやりしやりと母のお手玉冬ぬくし　平尾美智男
陰りなき白バラ飾る聖夜かな　平賀　明子
教皇の祈り倭の秋の空　平地　俊雄
褶明かりひと世の長居許されし　福島　翔
初鏡猫が家族の顔をせり　福田　泰江
小鳥来るたびに図鑑の栞落つ　藤田　雅明
戦前となるな八月白き飯　藤田ミチ子
免許証返し新調夏帽子　藤野　武彦
緋の色に蟹茹で上り夕時雨　渕野　栄子
家系図の文字薄れたり日脚伸ぶ　麓　勝子
冬構蛇口を括る菰二重　古川よし秋
舌打ちをして鵙の贄はづしけり　不破　元之
返り花ぽつりぽつりと話けり　本庄　誠子
へぎそばの香りただよふ田植かな　本間　敏
こまやかな雨にこぼるる萩の花　松岡　訓子
学僧の書に浸る日々冬安居　松永　夏峰
冬銀河たんすの底の母子手帳　松本みゆき
虫の音やいのういのうと夜なき石　丸山　文子
しゃんしゃんと運気も上がれ酉の市　三田さちこ
馬乳酒を交わす草原星月夜　三津木俊幸

疎みつつ恋ふる故郷秋夕焼　光榮　裕
除夜の夫年に一度の厨人　嶺井　緑
十一月棚田に鳥の影を置き　三原　利子
冬銀河色くろぐろと能戸瓦　宮岡　弘
枯野行く列車扉を手で開く　宮崎至夏子
もう誰も遊んでくれぬ雪兎　椋本　望生
菜畑に卒寿お出まし小春の日　武藤　洋一
風邪癒えて忽ち利かん気の子なり　望月　清彦
冬晴や鳥の図鑑をポケットに　森　悦子
亡き母の一間に残る古暦　森　加名恵
本堂は蝦虹梁の紅葉寺　矢田　敦子
紅の濃き林檎に伸ばす高梯子　柳井　恵康
新米の離乳食なる一匙目　山内　唱子
凛として得度受く子の日焼け顔　山岸　滋子
草の実の飛ぶ山里に沈下橋　山田　雅子
冬の夜や折りスカートを寝押しして　山野　節子
西口は陽の溜り場所冬木の芽　山之内喜七
生涯を離れざる家冬木の芽　山之内喜七
鎌で船叩きて潜る鮑海女　山脇香代子
黄落の校門軋む朝かな　雪下　純子
朝日差す軒いっぱいの吊し柿　湯田　畊道
過疎の村会津身知らず熟しまま　湯田　畊道

舷側に合掌の海女髪白し　弓場　達二
廃屋に残る空瓶竹煮草　弓場　達二
ひとり行く影は離れず秋遍路　横尾　浩
恵存の師の文字古ぶ冬苺　吉岡　亨
淡墨もて描く真白き花辛夷　吉田かずや
神杉にがうと風音神還る　吉田かずや
光る海隠れクルスの冬日向　吉田　慶
へ長調秩父音頭や兜太の忌　吉田　春代
梅花藻の水きらめきて空の青　吉野　幸治
緑さす跳び箱跳んで笑む少女　吉野　幸治
ちんまりと祖母は揺りいす日向ぼこ　吉野　幸治
春の雪払ふ音して女客　頼経　素風
古刹には古刹の香り冬ぬくし　渡辺　一甫

……題詠「道」……

寒林や湿槃の道のがらんどう　青木　一夫
尾道の坂は迷路や猫の恋　秋山　観水
天道虫結び目固きボッカの荷　朝倉垚代子
日短し道にチョークのけんけんぱあ　粟村　勝美
古地図手に大江戸をゆく風五月　石田　わ子
坂道や山茶花辺りひと休み　和泉　豊
まだ人の行き来のありし枯野道　伊藤　孝子
豊年の畦道を行く親子連れ　井野マサ子

路地裏の雨に明るき花八手　井上　宣孝
真つ直ぐな道白々と秋の暮　井上　幹彦
打ち水や子供御輿の通る道　今泉　忠芳
山荘へ辿れる小径初霰　今津ねむ女
時雨るるや熊野古道も野仏も　印出井慶子
時雨るるや宿る軒なし旧街道　印出井慶子
山の音足裏に聴く落葉道　江里口水子
むかご飯すぐに売り切れ道の駅　遠藤　操
童謡の時報と帰る枯野道　岡田　邦男
法隆寺出て法起寺へ柿の道　岡田　春人
芋殻火や父母のくる風の道　小鹿原君江
道草や蜥蜴追ふのに夢中なる　小川美津子
迂闊にも入りし杣道紅葉濃し　金子　熙
参道の獅子洗われて大晦日　川村　一重
山深き中仙道や遅桜　木地　順子
木道のつづくかぎりを燕子花　木原　登
どこまでが鎌倉古道草紅葉　草野　准子
紅葉山嘗てここにも塩の道　熊谷　房子
青春は汗の臭ひの柔道着　河野　重雄
夕焼けや傾くままに道標　越川　三朝
車椅子数歩を歩く落葉道　小髙　キセ
百千鳥喜寿は白寿へ道半ば　小塚　信江

駅までの道程五キロ日脚伸ぶ　後藤　利夫

夫と娘の来てすぐ戻る盆の道　小山惠津子

道祖神埋れし先が塩の道　金野　秀次

迂回路の砂利道狭し時雨けり　笹野　青陽

花野みち母の形見の杖共に　貞廣　一枝

小袋の新米光る道の駅　佐藤　正博

食道をきゅうんと通る寒の水　繁定　操陽

どの径も仏の道や梅匂ふ　志鶴　冨生

冬薔薇美術館への道しるべ　城宝寿美礼

登山道軍手で拭ふ道標　鈴木　経彦

村人に遇はねど生きて通ふ道　隅田　哲夫

丹田の懐炉たしかむ夜道かな　関矢　好枝

鎌倉へ続く古道や野紺菊　武井　猛

茅葺きの美山街道薄紅葉　田中　隆

蓮根掘憩ふ土塊乾く道　友田　芙美

夕虹や下山ルートを過たず　中澤　泰三

寄り道の遊び心や年の市　中島　保

塩の道街中抜けて枯峠　永田　滿男

仕置石遺る島道冬の雨　中野　弥生

ふるさとに広き空あり恵方道　新堀　芳惠

忠敬の行脚の道や草紅葉　野口　久子

畦道に猫車据ゑ大根干　畠中　俊美

哲学の道まつすぐにさくら舞ふ　服部一鷹堂

マラソンや我と向き合ふ冬木道　風街ゆう子

山車を引く声の湧きくる刈田道　平井小枝子

迷走か思ひ通りか蜷の道　藤根　豊

香り立つ金木犀にまわり道　藤森　のり

振り返る道に夕日の草紅葉　渕野　栄子

道普請共に移動の焚火缶　古川よし秋

悩み抜き選びし道や冬銀河　小川　竜胆

踏みてにゅっと出る銀杏や通学路　松本　信子

黄帽子の浮き沈みして花野行　馬渡　清蔵

歩むたび靴先しづむ落葉道　三宅　美芳

木の芽風女工哀史の峠道　宮沢　一郎

道場に声わななかせ寒稽古　村上　研一

冬の雨傘ずらし合ふ歩道かな　山岸　嘉春

父の背の小さくなりし落葉道　山下あゆみ

魁夷描くふる里の道まなうらに　吉田　芳子

道の端へ寄せられし死や草の花　吉野利美子

いくたびも倒木潜る登山道　吉村　賢次

学校の窓の夕陽や刈田道　六沢　幸子

能村研三選

【特選】

小鳥来て彫像ますますデフォルメす　神奈川　渡邊文子

室内で見る彫刻もよいが、野外の彫刻は自然と芸術の調和が楽しめる。木立に囲まれた空間に建つひとつの彫像、普段は押し黙って空を見つめているだけなのだが、小鳥たちの賑やかにさんざめく様子にいつもとは違って微笑ましかった。

鰤起し佐渡を幽かに浮かせけり　埼玉　築根喜美江

北陸の沿岸や佐渡などで十一月の終わり頃から強風と共に雷が鳴り、その頃鰤が回遊してくるのでその雷を鰤起しという。鰤漁の始まりの合図でもある。日本海の荒波にもまれ雷光が鳴り響く度に佐渡全体が幽かに浮き上がるように見えた。

……題詠「道」……

一つ火に見ゆる道のみ信じたる　埼玉　平井萌黎

「一つ火」は藤沢市の遊行寺で十一月に行われる勤行で、浄土の灯、大光灯をつける報土役は二度の打ち火は許されず、ただひと打ちで失敗は許されない。一つ火には必死の想いがこめられ清らかな気持で新しい年を迎えることになる。

【秀作】

競漕の身を倒しきるところまで　神奈川　小松光希
身をくづし枯蓮水を崇むやう　石川　上村冨美子
雪女郎一瞥を投ぐ真知子巻　広島　加藤浩
蒼天に針のひかりの冬芽かな　静岡　斉藤登志子
ハープ橋奏でるやうに夏燕　埼玉　金子絹子
榠樝の実北野武てふ個性　東京　小俣禮子
すそわけの新米入れは手ぬぐいで　埼玉　羽立和子
褶明かりひと世の長居許されし　長崎　福島翔
想ひでといふ色なき風のごときもの　兵庫　大盛弥生
丹頂の命の声を交はし合ふ　埼玉　平井萌黎
天を突く裸木にある力瘤　大阪　北村タカ子
林檎もぐ青空ぐいと引っぱって　東京　清水喜代美
窯を出る陶の貫入今朝の冬　神奈川　久根口美智子
淡海の沖に風立て鮒舟　愛知　正木羽後子
オカリナの風韻のこす石蕗の花　大分　和田こうせい
蕭条と一瀑抱き山眠る　新潟　大島小春
頬杖の片手に余る秋思かな　岡山　渋谷達磨
家持（やかもち）の山河軋ませ鰤起し　福岡　山脇香代子
冬籠心の中に一樹あり　兵庫　雪下純子
深更に膨らむ音や落し水　大阪　片上強

……題詠「道」……

月の漠はるか越え来ぬ螺鈿琵琶　三重　矢田敦子
行くほどに道現はるる枯野かな　栃木　三橋順子
稲光神訪れの道しるべ　兵庫　梶弥生
蒼天の点膨らみて鷹の道　埼玉　武藤三山
アフガンに水の道あり冬銀河　京都　濱田朋子

〈佳　作〉

掲載は氏名五十音順です。

秋祭笛方腰に調子取り　相沢正志斎
冬日射す円座重ぬる禅の寺　四十物文代
秋天に遊びしひつじ雲一つ　明石　己之
地震の傷抱きて里の山眠る　赤繁　忠弘
切り通し緋の移りゆく曼珠沙華　赤嶺百合子
大空に点描の線鳥渡る　秋元　さよ
百年の一炊の夢冬至粥　秋元　虹雪
主なき金木犀の香を放つ　秋山　常雄
狭霧立つ山にぽつかり天守の灯　浅野　君代
名刹の雨音やさし酔芙蓉　浅野　浩利
枯れてなほ凜と立つなり曼珠沙華　東　裕子
雪吊の朝の空気を絞り上ぐ　あまの樹懶
注連飾る印半纏紺匂ふ　新井　和生
鉛筆を削り揃へて年深む　粟村　勝美
襞白き山を背に冬紅葉　飯尾美智子
一葉づつ風に乗りたる朴落葉　池田　道子
吊し柿畳に影の楽譜めき　伊佐治秀一
天龍の奔流を呼ぶ大夕焼　井出久美子
冬空を大きく廻す鳶かな　井出久美子
音軽く嶺の影鋤く春田かな　伊藤はじめ

広戸風吹くか野分が四国沖　井上　幹彦
アパトサウルスのやうな雲とぶ野分後　井上　幹彦
巨大なる筆鋒鷹の舞ふごとく　井口冨士夫
玄海に沈む日輪鷹渡る　井口冨士夫
碇泊の巨船の明かり夜の秋　井口冨士夫
水桶の水なみなみと神の留守　今井　哲也
雨雲の一隅照らす麦の秋　岩城眞理子
日時計の刻やまだらに落葉打つ　岩田　裕司
飛びたくて全速力の風ぐるま　岩水　節子
山中節流るる渓の風さやか　植木　静恵
揺れてこそ風情深めて秋桜　上田　雅子
冬銀河子に反骨の喉ぼとけ　梅田ひろし
天高し風の百態知る風車　風　車
鉦叩き生きる気力を失わず　江口八重子
笹鳴を背に釣人の動かざる　大久保文夫
飛驒人の素朴な便り冬ぬくし　逢坂　紀子
数式の板書飛び交ふ燕　小島　徹
惜別や目深にかぶる冬帽子　太田　和志
板の間に消ゆる足音霜夜来る　大寺千恵子
蝦夷富士の湧水の味冷奴　大沼　洋子

瞑りて流れのままの春の鴨　田岡　晃正
冬ぬくし人を拒まぬ自動ドア　岡田　邦男
烏賊釣火闇の現(うつつ)の我照らせ　小川　和子
百年の槌の手光り砧打つ　沖野　遊民
夢語る子供のやうに麦踏まむ　奥田　豊
小流れを跨ぎて鮎のぱっと散り　小口　静江
枯菊の括られしまま焚かれけり　奥村真由美
点筆の指へ魂込む寒灯下　尾崎千代一
晶々と夕日に庭の柿たわわ　梶原　末登
母の手へ行く子のスキップ花の昼　片倉　音訪
まどろみて波の音聞く石蕗の花　勝又　敏智
黒織部の歪み掌影冴ゆる　金澤　一水
百日の雪との暮らし始まりぬ　金子　照栄
ありなしの風に屋根打つ椎の音　上紺屋葉月
万緑の底に人里奥信濃　河合　澄江
始発への近道の畦土筆立つ　川口　茂則
裸木となりてすべてを受け入れる　川副　康孝
灯を消して雛の安らぎとり戻す　川副　康孝
朱印書く尼の細指初紅葉　河野　正海
山峡に煙ひとすぢ秋収め　岸　さなえ

白鳥の天使のやうに羽撃けり　北川　愛子
レモン捥ぐ君の横顔朝日射す　北原　節子
告白のごとく身を裂く石榴かな　木原　登
葉脈も鼓動もひとつに新樹光　桑原　淑子
冬銀河大河は地球を巡る舟　桑原　淑子
夕顔の開き初めたり震えつつ　源通ゆきみ
雲を呼び寄せては語り山眠る　小池ちず子
叩く時たたら踏みけり土竜打　小谷　一夫
被爆川此の世の蛍生みにけり　小谷　一夫
ブルーシート被ふ屋根越し雪の富士　小谷たかし
いち早く風を捉へし男郎花　小塚　青楓
前島密くはへて投句新松子　小塚　信江
掴まれし髪切虫の憤り　後藤　利夫
砂時計また逆さにし春を待つ　後藤　史子
日面に依る蓑虫に暮れかかる　小西　貴子
指切りの遠き思い出赤のまま　木幡　嘉子
流れにも序曲はありぬ水芭蕉　小林　英樹
運針の指穏やかに初月夜　小林　智湖
日本海冬の夕日の崩れ落つ　金　道博
星屑の光の中にある聖樹　金　道博
荒海や冬夕焼のあだびかり　坂下　信子
夕空は蒔絵の如し冬木立　坂下　信子

小夜時雨闇より土の匂ひせり　﨑谷　弘子
横たはる破船のきしみ冬銀河　桜庭　恵
薦掛けの化粧ほどこす武家屋敷　笹野　邦子
月光を積みゆつくりと観覧車　笹原　郁子
秋茜富士の風より生れたり　貞住　昌彦
オカリナの音色広がる花野原　佐藤　敬子
梅漬けてうす紅色の指愛す　佐藤　美保
体験の虚実は問はず生身魂　佐藤貴白草
廃村の縄文の地や草紅葉　佐藤　祐佶
惜敗の涙寒水ぐいと飲む　猿渡　道子
太き尾振る牛しんがりに牧閉す　猿渡　道子
凩や街の形に街燃える　澤田　穣
カリオンや転び走る児天高し　塩谷　民子
凩に一歩踏み出す息を張る　重冨美津惠
マドラーをつまむ指美し聖樹の灯　篠原　弘子
投網打つ冬夕焼の直中へ　芝田　太
音の無き大津軽野に雪降れり　神　繁雄
豊穣の稲穂の垂れる秋津島　宗　詩
鳩の声渡りて靄の動き出す　角　雅行
本の帯少し破れてゐる小春　関　雅己
金魚鉢睡(ねむ)りの奥に置いておく　関根　瞬泡
かや根方鈴ふる虫は恋のうた　薗部　桂

雨の糸ゆるくほどけて合歓の花　高野　知作
水底の雲ゆつくりと冬浅し　高野　知作
玉風を斜めに受けし木の葉髪　高橋多美子
滝音の木霊のうつつ山眠る　高橋美智子
穂すすきの風にほぐれしうねりかな　高見惠美子
神官の礼深々と山開き　武井　猛
この先は死生一如や冬ざくら　竹内さと子
雪吊の縄を投げゐる紺法被　竹中　友弥
椅子ふたつ並べ湖畔の星月夜　竹見かぐや
フラスコの光柔らか春兆す　竹見かぐや
水音に紅葉あやなす無住庵　田島　貞子
切干しの日向の匂ひ裏返す　田中　ゆず
殉教の城の石垣すみれ咲く　田中　強
淋しくて枯野は雲を引っ被る　田中　俊
木枯しに裁かるるごと吹かれけり　田中　俊
北斎の不二に波裏淑気満つ　田中　左海
山塊の闇濃き木立後の月　田中　美月
日向ぼこもう流れない砂時計　谷　俊和
緩和病棟静かに春の日のなかに　津田　隆
その中に希望のいろや海の虹　露木　伸作
草や木へ言葉のやうに春の風　鶴田ちしほ
スワイプの如く触読秋の声　遠坂　洋子

筆置きて半紙の余白十三夜　戸塚　邦子
空蟬の琥珀色なる記憶かな　都丸　浩美
黄落の最終楽章メゾフォルテ　頓所　友枝
今日生きて今をよろこび露けしや　中川　計介
ふとこぼる言葉美し竜の玉　中川すなを
モノトーンの世界につんと雪だるま　中澤　玲子
けんか凧一刀もって天翔けり　中島　啓介
牡丹焚火揺るる焔や恋の色　中島　利江
冬ざるる時間（とき）のゆりかご難破船　永瀬千恵子
あめんぼういちばんすきな雲に乗る　永田タヱ子
数かずの生命蓄へて山眠る　永田　満男
木枯の息づき荒し木曾三川　永田　満男
冬浪のしぶく岩屋にマリア像　中野　弥生
直面に隠す一魂秋深し　中山　幸子
畝立てて伸ばす背筋や雁渡る　名雪　國男
北窓を塞ぎて海鳴り遠くせり　成木れい子
若き日の詩集の折目冬薔薇　鳴海ふく江
優しさも時には淋し寒椿　西久保キクノ
秩父一揆のことも遥かや後の月　西野　敏子
岩礁の松の滴り霧上る　西村　敏廣
空耳の中に母なる秋の声　西村　久子
噴水の止まり俄に街の音　能田　孝昌

令和と言ふ日の出の色の落葉踏む　野口　久子
山茶花の散りては咲ける息吹かな　花塚　一枝
北斎の藍色の如山眠る　羽田　孜子
千年の大樹の下や飾売　浜田はるみ
火をおこす昔ながらの渋うちわ　濵中アキ子
松が枝に巣籠る鷺の息づかひ　濵野　裕子
雪晴れの白一貫の村暮らし　林原　敏夫
檀林の松の香立たすしぐれかな　原　瞳子
寒紅をひきて生き抜く顔となり　原田　熙恵
紺碧の空へ捧ぐる花辛夷　原　雅
一途なる助走白鳥飛び立てり　引持　幸子
新幹線一閃雪の富士を薙ぎ　樋口　雄二
わだつみの吼える汐路や十二月　樋口　雄二
定年やなほゆるやかに日脚伸ぶ　久田　正己
青みかん我が晩学の四畳半　菱野としみ
裸木のいよよ命の勇ましく　平井　萌黎
しやりしやりと母のお手玉冬ぬくし　平尾美智男
教皇の祈り倭の秋の空　平地　俊雄
大空へ深呼吸して犬ふぐり　平野　哲斎
西空に残月河豚の袋糶　平原　廉清
絵手紙に柿の甘さも届きをり　深沢　頼子
篝火を手に手に波へ海女祭り　深谷　泰子

被災地にあまねく冬月槌の音　福嶋　卓爾
交差点すとんと暮れて討入日　藤田美和子
大空へ飛び立つ構え蟬の殻　繭　己　子
蒼空の懦夫の影曳き冬耕す　古市　絵未
影向の石のかけらも時雨色　古市　絵未
春光の飛沫を払ふ棹捌き　古川よし秋
大根を洗ひ上げたる空仰ぐ　増田　笑子
枯蔓に絡む力の衰へず　益田満寿美
寒月や拍子木の音透き通る　町田　楽人
一切の音よせつけず那智の滝　松尾　一子
夫の声とどくあたりに蕨折る　松尾　一子
鯉はねて組み替わりたる花筏　松岡　訓子
数え日やひとり住いの加減あり　松岡久美子
神籬（ひもろぎ）の鳥見失ふ初冠雪　松田　静枝
雁わたし縄文土器に耳ふたつ　松田　静枝
みちのくの風が極める凍み豆腐　松見喜美子
きらきらと網に小鮎の鼓動かな　松本　信子
冬銀河たんすの底の母子手帳　松本みゆき
自動ドア踏み出す一歩秋暑し　丸本　圭
蓮の実の飛びて水面の空揺らぐ　丸本　圭
虫の音やいのういのうと夜なき石　丸山　文子
馬乳酒を交わす草原星月夜　三津木俊幸

秋さびし遠くで撓う送電線　箕輪　京子
ふと母の声そら耳の芒原　箕輪　京子
波音は母胎のリズム小鳥来る　味村　京子
冬銀河色くろぐろと能戸瓦　宮岡　弘
凍雲や朴の木静かに屹立す　宮崎　清子
残照の海凪いでをり鳥渡る　宮崎　玲子
花野行く雲は力を抜いてをり　三吉　昌子
中天に刺さる煙突どこか春　椋本　望生
産土は此処ぞと渋柿熟れにけり　毛利　律子
翌脈めく石垣透けり鬼蜻蜓　本江　明
秋夕焼け鎌研ぐ父の独り言　本谷　公國
裏木戸のぎいと軋みて石蕗の花　百田登起枝
葉牡丹の日差しも風も巻きこめり　森　定子
抽斗を引くや団栗右往左往　森　啓
向ひ風袖より抜けて冬来る　森　静子
木の実ふる音まっすぐや石畳　森　靖子
新しき光を胸に初詣　森田　よね
雪山へ街をのみ込み虹立てり　諸星　泰子
姿良き島の端明り野水仙　山内　健治
街師走托鉢僧のほつれ袖　山上　正視
誡めの碑越えし秋出水　山岸　壯樹
教皇の言葉や清し時雨るるも　山下　綾子

辞書探る苛む手指霜降る夜　山田　斗星
生涯を離れざる家冬木の芽　山之内喜七
一歩づつ神護寺目指し落葉踏む　山本カヨ子
散る紅葉うけとめて苔やわらかし　行藤　郁代
逆光に浮くしろがねの芒原　湯田　畊道
捨てて来し村まんさくの咲く頃ぞ　湯田　畊道
ひとり行く影は離れず秋遍路　横尾　浩
湯の宿に田の神も座す秋うらら　横田　昭子
恵存の師の文字古ぶ冬苺　吉岡　亨
雨あがり鶏頭の赤滴りぬ　吉島　芳江
淡墨もて描く真白き花辛夷　吉田かずや
山鳩の声くぐもりて雪催　米倉　和美
被災地の子供は元気冬木の芽　若林　佐嗣
辞書をひく音柔らかく夜半の冬　若山　衛
土を踏む音の湿りや春隣　ありかえぼん
古刹には古刹の香り冬ぬくし　渡辺　一甫
さやさやと萱さやさやと彫像たち　渡邊　文子
おおかみの消えし秩父や風尖る　渡辺　倫子
……題詠「道」……
行き行きて枯野の色に染まるまで　青木　孝子
天道虫結び目固きボッカの荷　朝倉垈代子
姥捨の重き道程（みちのり）月冴ゆる　井川　香

声だけが近付いて来る霧の道　伊藤　忠男
道問へば里の訛りや返り花　井上由美子
南天の実のふさふさと風の道　今井　恵子
打ち水や子供御輿の通る道　今泉　忠芳
しるべ無き道を越境飛来鴨　風　車
雪道は己探しのようなもの　大坂　和子
冬ざれて空を指したる道標　大玉　雅之
ぐつと抱き合ふ道祖神夜の霜　大野　洋子
芋殻火や父母のくる風の道　小鹿原君江
けら鳴くや道は地球をとび出しぬ　加藤　貴子
一寺づつ肩の荷おろし遍路道　神根　信
道草の子のかくれんぼ息白し　柄谷　せつ
この道がすきであるいて踏む落葉　菊川　京子
コート脱ぎ駅一つだけまわり道　木下　信博
雪五尺足跡のみを道となす　久保　厚夫
鴨群るる幾重に生まれし水の道　黒島美紀子
木道の靴音待てる赤蜻蛉　小池ちず子
道連れとなりて良夜の影法師　小柴　智子
来し方の道疑わず木の葉髪　小島　政子
浜万年青（はまおもと）母の磯笛聞こゆ道　小堀たつ代
薄明へ歩き出す道着ぶくれて　小山　泰子
絹の道飛天の舞ふや星月夜　櫻井　榮一

葛咲くや右さらしなの道標　佐藤　勝

永き日のとろとろ暮るる蜷の道　芝田　太

牛の眼の入道雲の湧きにけり　清水　良郎

退職の指にチョーク粉水温む　下和田真知子

村老いて雪道細くつながりし　神　繁雄

道が消ゆざわざわざわと秋出水　鈴木そう子

菖蒲葺き海道の町水曲る　髙塚　早苗

来し方の道に今朝ある椎若葉　髙梨　裕

鎌倉へ続く古道や野紺菊　武井　猛

枯葉ふみ母と遊びし道に立ち　武岡百合子

金色の風をあつめし稲穂道　舘　健一郎

道づれもなく大空を鷹渡る　出店智恵呼

春泥をイーハトーヴォへつづく道　飛田　兼延

一面の冬田分けゆく奥州道　頓所　友枝

コスモスの中風船の走り来る　中川ヒロ子

道の辺の野菊は風に目覚めけり　中島幾久子

呼び寄せて令和二年の恵方道　なかじまあゆむ

秋草の名を尋ねつつ塩の道　中條今日子

夜神楽や神の降り来る道開く　永田タヱ子

仕置石遺る島道冬の雨　中野　弥生

古里の白き畦道朝の霜　中畑　耕一

空に水脈引き大白鳥の帰り来る　長嶺冨美子

目に見えぬ風道山家の秋簾　名村　五月

獣道見えて一筋月光裡　西川　安子

まっすぐな道なき道の花野かな　西野　徳重

塩の道のこる泉とさえずりと　西本　文子

初めての道の遠さや草いきれ　能田　孝昌

忠敬の行脚の道や草紅葉　野口　久子

道一つ違へてぱっと暮早し　萩原　豊彦

晩学の道の細道花野道　羽田　孜子

村中の春を並べる道の駅　羽矢　眞人

風の道たどり落葉の嵩をなす　林　勇二

佳き人と時雨心地の道歩く　日野ひさじ

手掘り跡残る隧道秋の冷　平松　公代

渺渺と風のゆく野や冬田道　藤岡　定子

香り立つ金木犀にまわり道　藤森　のり

土産待つ子は背伸びして萩の道　古屋　一雄

まわり道して落葉踏まずにゆく童　堀毛美代子

急くこともなし寛かに枯木道　前沢　五郎

ばさりばさり枯れ柏の葉舞ふ道に　松木　溪子

満月へ続くこの道ペダル漕ぐ　松原　敏子

足あとの道なき道へ雪月夜　松本みゆき

上代の足柄古道すすき原　藪田　拓司

尋ね来て道なほ遠し秋の暮　山田　凍崖

空に道あるが如くに鳥渡る　吉浦　増

夕映えの消ゆる早さや刈田道　吉田　靜子

原田清正選

【特選】

海胆を割く老斑の掌のたしかなる　熊本　髙本よしえ

南三陸の伝統ウニ漁は有名である。小型船の上で箱眼鏡を咥えカギの付いた長い竹竿を巧みに操りウニを収穫する。豊かな経験と技術がなければできない仕事である。その採りたての大量のウニを手早くさばくのも経験。黄金のウニの身と漁業に歳を重ねてきた老班の手が輝いて見える。

遠山にひと邑寄せて冬ざるる　愛知　加藤晴美

紅葉で華やいでいた山々もすでに色彩を失い、動くものもまれな鄙びた風景になってしまった。山懐につつまれた茅葺屋根からは囲炉裏のけむりがのぼる。間もなく雪を迎え真っ白な世界に埋もれてしまうだろうが、そこに住む人々は肩を寄せ合い春を待つ。日本の原風景を詠んで秀逸。

……題詠「道」……

古地図手に大江戸をゆく風五月　埼玉　石田わ子

東京のいにしえを訪ね古地図を手に歩き始める。当時の古地図と現代の風景を見比べながらの散策は歴史好きでなくても魅力的だ。かつて小説で読んだ出来事に思いを馳せつつ道をたどれば、江戸時代にタイムスリップしたようで五月の風が心地よい。老舗での食事も一層趣きを添える。

【秀作】

何もかも一段落の冬田かな　石川　菅原孝子
夜桜やたれも幸せさうにみえ　石川　吉村千枝子
病む妻に言ふ嘘かなし遠蛙　岐阜　伊佐治秀一
ダム底に村の石垣渇水期　三重　浜西修
森番の膝に寄りくる軽鳧の雛　群馬　永山比沙子
おおかみの消えし秩父や風尖る　埼玉　渡辺倫子
猪追ひて戻らぬ犬を呼ぶ谺　愛知　尾崎恵美子
虫の音の絶えてラジオの深夜便　東京　西村久子
塩こしよう定位置にある無月かな　茨城　蛯原愛子
ふる里の日暮れの匂ひ吾亦紅　東京　印出井慶子
炎天の坂のぼりきてひとりかな　静岡　池谷硬司
走る野火とどまる野火や草千里　三重　中山秀子
極月や灯の明あかと地下工事　青森　中澤草子
かいつぶり潜る湖水の昏るるまで　神奈川　嶋村博吉
終戦日白い御飯に咽せにけり　福岡　原雅
冬浪のしぶく岩屋にマリア像　新潟　中野弥生
ケセラセラ母のはな歌年暮るる　東京　北島孝子
医者嫌ひ薬嫌ひやちやんちやんこ　大阪　角雅行
無言館出でたる耳に虫の声　宮城　柏木ともみ
磔刑の地の松籟や鷹舞へり　愛知　鳴海ふく江

……題詠「道」……

新緑や鳥の図鑑を道連れに　大阪　北村タカ子
街へ行く道一本や深雪村　群馬　星野光子
道行きや御捻りの飛ぶ村芝居　愛知　山口勝
俊寛の配流の道や鷹渡る　鹿児島　白男川孝仁
浜万年青（はまおもと）の磯笛聞こゆ道　三重　小堀たつ代

〈佳　作〉

掲載は氏名五十音順です。

紀国や山又山のもみぢかな　秋口　大門
吊橋の番小屋閉めて山眠る　朝倉芚代子
熱の子に添ひ寝のままの除夜の鐘　飴矢キツ子
木漏れ日やこずゑ移りに来る小鳥　新井國太郎
茅葺きのそのてっぺんに草の花　荒川　光江
帰省子に老犬ボール咥へくる　有松　洋子
磯宮の磴の険しや海桐の実　安藤　鋭子
波音は豆をころがし村芝居　池田　綏静
初夢の桜吹雪をさまよひぬ　石井　暁
羽子板市少女の瞳きらきらと　石川　暉子
母の選る着物あれこれ初鏡　石田　わ子
放たれて身震ひ一つ狩の犬　石松　禎佑
寒林や一基戦没学徒の碑　市村　栄理
みちのくの旅のひと日や紅の花　出田　清子
紅茶でも飲みませんかと秋の風　伊藤　竹代
掘り終へて泥の鎮もる蓮田かな　伊藤　舜
玄海に沈む日輪鷹渡る　井口冨士夫

廃坑の高き煙突月まどか　井口冨士夫
サーカスのテントもできて秋祭り　井口冨士夫
ロボットの愛犬と見る冬星座　井口冨士夫
消し屑は文字の亡骸秋灯下　猪原アヤ子
青田風ロマンスカーは東京へ　岩本ひさみ
冬銀河子に反骨の喉ぼとけ　梅田ひろし
鱗雲不漁の海を見おろして　漆原　みつ
アフガンに捧げし命冬ざるる　小浦　瞭子
隣り合ふ人も旅人秋日和　大石　坦
数式の板書飛び交ふ燕　小島　徹
山粧ふ銀のきつねに出逢ふかも　大島　国康
惜別や目深にかぶる冬帽子　太田　和志
群といふ微かな孤独浮寝鳥　岡田　政信
百年の槌の手光り砧打つ　沖野　遊民
風に刃のあるとも見えず破芭蕉　奥中　和子
口嗽ぐ水より秋の立ちにけり　奥山　功
産声に男の子のちから雲の峰　垣内　薫

満州は地図になき国霾れる　柿沼　洋子
ふる里は蜜柑輝く瀬戸の島　春日　良江
まどろみて波の音聞く石蕗の花　勝又　敏智
きつね火を語る父の目童の目　加藤　照枝
百日の雪との暮らし始まりぬ　金子　照栄
夕風や枝に失意の武者絵凧　金子　熙
旅にして余す時間よ秋の暮　上紺屋葉月
桃割れの襟元うれしお年玉　亀澤　邦男
庭石となりし石臼ちちろ鳴く　柄谷　せつ
水澄みて美しき人逝きにけり　菊地　孝也
山峡に煙ひとすぢ秋収め　岸　さなえ
天を突く裸木にある力瘤　北村タカ子
赤トンボ指一本を立てて見る　北村タカ子
襖絵は大観の富士涼新た　北村タカ子
星空に横顔子規の忌なりけり　木原　登
告白のごとく身を裂く石榴かな　木原　登
銃声は木霊となりて山眠る　喜来富士子

限界集落泡立草の沸騰す　燕北　人空
新涼や寝ころんで読む一茶の句　久保　厚夫
鬱の字に眼鏡とレンズ秋灯　源通ゆきみ
西方を見据え動かぬ赤蜻蛉　小久保まさる
叩く時たたら踏みけり土竜打　小谷　一夫
父と母同じ位牌や原爆忌　小谷　一夫
ポケットに両手遊ばす余寒かな　きむらあきこ
健さんが下りて来そうな雪の駅　後藤　明美
曲り家の土間静もりて冬菜かな　五ノ井研朗
指切りの遠き思い出赤のまま　木幡　嘉子
運針の指穏やかに初月夜　小林　智湖
襟立てて毀れかけたる地球行く　小原　緑
うたたねに懐かしき人ほり炬燵　小松　帛子
秋うらら録画茂吉に出羽訛り　小室　哲範
浜茹での蟹の湯気たつドラム缶　近藤　英明
冬菊の日にくるまりて香りけり　齊藤　都子
図書館の此の席がよし小鳥来る　斎藤　博文
水占に文字浮かびくる小春かな　斎藤　洋子
かたつぶり雑事の多き月曜日　坂口　和代

どの寺へ行くも坂道時鳥　佐々木峯子
鑿あとの青の洞門秋の声　佐澤　俊子
咳ひとつすれば問はるる日暮れかな　眞田　好男
秋深し硫黄の匂ふ山の宿　佐野　涌子
花吹雪鉤の手多き城下町　座間　英幸
千丈を落ちきし那智の水の秋　澤　長寿
おなもみを胸に駆け行く通学路　芝　由雄
投網打つ冬夕焼の直中へ　芝田　太
縁側の碁盤の厚み日脚伸ぶ　清水　良郎
山頂へ続く段畑島みかん　下田あつ子
小面（こおもて）の映ゆる舞台や後の月　白男川孝仁
落つる時大き口開け石榴の実　菅野トモ子
街角の移動図書館薔薇香る　杉﨑　淑子
マカロンの袋の軽さ冬うらら　鈴木　麻子
読みきかすノアのはこ舟冬銀河　鈴木　計廣
肌寒や人恋しくて文を書く　鈴木わかば
尾瀬沼の空透きとほる鵙の贄　角　達朗
鳰の声渡りて靄の動き出す　角　雅行
本の帯少し破れてゐる小春　関　雅己

巫女募る貼り紙のあり神の留守　関沢　洋一
着ぶくれて手振り大きくもの申す　関田　和子
晩秋や歩きなれたる女坂　相馬　禮子
地球儀の海の群青鳥渡る　高岡　幸子
草萌や仔山羊の耳は日に透きて　高原　晴子
空色の切符握りて帰省かな　田上　勝清
金縷梅の花ほどけゆく切通し　髙柳　ちゑ
夏の夜の恋の光や海蛍　高山　鞆則
納税期夫さがし物ばかりして　武市　宣子
椅子ふたつ並べ湖畔の星月夜　竹見かぐや
けふからは白髪を染めず草の花　鷺　汀
手相見の小さき明りや雪催　舘野　茂子
大根干す指さき息にぬくめつつ　田中　ゆず
鯊日和舟屋に寄せる波静か　田中　隆
殉教の城の石垣すみれ咲く　田中　強
北斎の不二に波裏淑気満つ　田中　左海
濃淡の霧にしづみぬ紀伊の山　田中　美月
安房上総湖と化したる秋出水　月岡　千秋
望郷や足にやさしき落葉道　富樫　幹朗

冬川や白鷺無言動かざる　外村　吉淳
あやとりの指しなやかに置炬燵　富田　栄子
丁寧に畳む新聞年詰まる　友田　芙美
モネの絵の水ひそひそと春動く　鳥越やすこ
黄落の最終楽章メゾフォルテ　頓所　友枝
木曾谷の闇を濃くして群蛍　直井　照男
レコードに針を落して昭和の日　長井　良孝
天空の城へ紅葉の九十九折り　中沖　正之
木守柿鳥あらそはず残しをり　馬上　絹代
捨てられし葉の山にほふ生姜市　中島たけ子
あの世まで行きさうになる日向ぼこ　中島　保
八月や孝行せよと兄の遺書　中條今日子
点滴の時を刻むや冬銀河　中田　浩作
立冬や潮吹岩の波高く　長嶺冨美子
畝立てて伸ばす背筋や雁渡る　名雪　國男
せみ生るるくしやくしやの羽ふるはせて　西川　安子
紅葉散る且つ散り池の錦かな　西島　晴治
耳遠くなりて健やか夏のれん　西本　文子
篠笛は子供囃子か田水沸く　額田　昌安

刈田焼く煙夕日にしずもれぬ　沼澤　正子
百までは生きる顔して注連を綯ふ　野口　久子
ふっと開く記憶の扉帰り花　萩原　豊彦
爽やかや鐘澄む島の天主堂　萩原　豊彦
燕くる開けっ放しの農具小屋　橋本　菊乃
小春日や日に二本てふバスに揺れ　波多野富代子
天高しどこまで伸びる秋田杉　花塚　一枝
木の実雨静まり返る無言館　濱名　博光
旅人として乗るバスや菊日和　林　照江
初時雨カタカナ文字の祖母の文　原　昌子
ゆずの香の大根なます母偲ぶ　原田　明美
寒紅をひきて生き抜く顔となり　原田　熙恵
雪催ひ鷹女の像は帯締めて　張替　和子
緑蔭や今がたけなわ紙芝居　阪西　省吾
窓越しに鵯の目と合ふ冬日和　阪東　静子
藻屑蟹一斗缶より遁走す　引持　幸子
消えさうな村に灯るや木守柿　樋口　昇る
阿蘇五岳色なき風の中にあり　人見　正
健やかに生き共に老ゆ敬老日　日野ひさじ

初旅や伊勢路の海のま蒼なる　平井小枝子
西空に残月河豚の袋糶　平原　廉清
褶明かりひと世の長居許されし　福島　翔
木菟の子の太き足もて木を登る　藤村　啓子
時雨忌や京へ気ままな二人旅　古川　照子
新刊の立ち読み釣瓶落としかな　正木羽後子
義士の日や町に出て買ふ肥後守　増田　宇一
一切の音よせつけず那智の滝　松尾　一子
こまやかな雨にこぼるる萩の花　松岡　訓子
雁わたし縄文土器に耳ふたつ　松田　静枝
みちのくの風が極める凍み豆腐　松見喜美子
自動ドア踏み出す一歩秋暑し　丸本　圭
蓮の実の飛びて水面の空揺らぐ　丸本　圭
奈良明日香稲穂のかおり風にのり　丸山　文子
一人居の炬燵机に食卓に　三浦　貞葉
馬乳酒を交わす草原星月夜　三津木俊幸
疎みつつ恋ふる故郷秋夕焼　光榮　裕
北国にどすんどすんと冬来たる　宮内　信子
不揃ひの屋台の椅子や初しぐれ　宮崎タエ子

揺れて着く一輛列車稲の花　宮崎　玲子
靴紐にいつのものともゐのこづち　宮野　栄子
罠掛ける男の向かふ枯木立　村上つね子
阿蘇五岳尾花を波として浮かぶ　村田　寛文
落葉松の梢の上の冬日かな　村橋　克雄
さ湯に溶く子犬のミルク雪もよひ　毛利　喜子
奉祝の時代絵巻や秋の虹　持田　市朗
冬晴や鳥の図鑑をポケットに　森　悦子
冬ざれの山青ければ海蒼し　矢島　清
秋を呼ぶ男滝女滝の木曾路かな　簗田　いと
冬構して半年は子の元へ　山岸　郁子
誡めの碑越えし秋出水　山岸　壯樹
冬蜂やそろりそろりと吾がよわい　山口　楓子
高原に青春の色青薄　山口　勝
むかご飯牛のせり市近づけり　山下　守
自転車も乗せて養老線の秋　山本　歌子
捨てて来し村まんさくの咲く頃ぞ　湯田　畊道
秋高し薪割る音の跳ね返る　湯田　畊道
越後まで続く山脈冬銀河　湯田　畊道

日溜りは母のぬくもり柿を剝く　吉浦　増
海豚の海五橋をわたり天草に　吉田　慶
お涅槃に口なめらかな絵解僧　吉田　靜子
水ぬるむ母に私の居た時間　吉田　芳子
亡夫かとぞ耳を澄せば嫁が君　吉村　艶子
お地蔵の微笑み返す路地小春　若林アヤ子
敗戦忌骨なき享年二十六　渡邊しゅういち
紅葉且つ散る姫塚を守る植輪　渡邊　廣子

……題詠「道」……

尾道の坂は迷路や猫の恋　秋山　観水
良寛の乞食の道冬枯るる　安積　邦夫
夏の霜父はこの道征きしまま　阿部風々子
日短し道にチョークのけんけんぱあ　粟村　勝美
燕来る宿場名残りの中山道　安藤　鋭子
武士の道説きし藩校冬に入る　五十嵐利明
菜の花や女人一人の遍路道　井口　義則
木洩れ日の小道をひとり秋惜しむ　出田　清子
声だけが近付いて来る霧の道　伊藤　忠男
道問へば里の訛りや返り花　井上由美子

打ち水や子供御輿の通る道　今泉　忠芳
石蕗明かり万葉の道句碑の径　岩金　妙子
時雨るるや熊野古道も野仏も　印出井慶子
上州の風に道あり十二月　岡部　豊
ただ歩くだけの日課や青田道　奥山　功
秋澄むや沖よりつづく神の道　川口　茂則
木道のつづくかぎりを燕子花　木原　登
明易の雲踏んで行く縦走路　國井免独斉
芋虫の道路を渡る速さかな　木暮　千江
夕焼けや傾くままに道標　越川　三朝
木道に上り下りや草紅葉　小林たけし
信玄の軍用道路茸狩　五味　久子
山眠る窯場に続く道細し　小室けい子
一齣は猫通ふ道新障子　齊藤　都子
生垣のねこの抜け道石蕗の花　笹野　久代
葛咲くや右さらしなの道標　佐藤　勝
街道の低き庇や軒菖蒲　塩谷　民子
永き日のとろとろ暮るる蜷の道　芝田　太
職退いて妻にしたがふ萩の径　代田　雅文

御山への登り下りの道をしへ　進藤　鳥人
道途切れ闇ひたひたと月夜茸　鈴木　素子
豊後路や軍神眠る里の秋　高木美恵子
鎌倉へ続く古道や野紺菊　武井　猛
天城路やいつか綿虫道づれに　田中哲山人
枯木道イブモンタンを口吟み　辻　肇
大枯野道はどこにもなかりけり　津田　京子
菜の花や同行二人へんろ道　殿守　育子
年の瀬や女人の混じる道普請　飛田キミ子
自転車の僧衣ひらひら稲田道　長岡　和恵
秋草の名を尋ねつつ塩の道　中條今日子
夜神楽や神の降り来る道開く　永田タヱ子
道尽きて小さき滝や紅葉山　永田　満男
秋草に触れリハビリの試歩の道　永山比沙子
忠敬の行脚の道や草紅葉　野口　久子
冬ざれの国道過るはぐれ猿　野田　利勝
哲学の道まつすぐにさくら舞ふ　服部一鷹堂
黄落や道掃く人の背のまろし　服部　正遊
夭逝の友を浄土へ道をしへ　花塚　一枝

白鳥の沼に光の道あるる　浜田はるみ
工女らの越えし山道雪もよひ　濱名　博光
天空に道しるべあり鳥雲に　原　雅
山車を引く声の湧きくる刈田道　平井小枝子
村と村繋ぐ板橋虎落笛　福井　英敏
黄泉路まで少し道草日向ぼこ　藤根　豊
迷走か思ひ通りか蜷の道　藤根　豊
讃美歌の洩れくる道や菊日和　松村　知香
寄り道はいつものパン屋小鳥来る　宮田　一代
冬ざれや獣道いま風の道　武藤　洋一
ふりむけば夢二の気配花野道　目黒　輝美
水仙やふるさとを割る高速道　森　啓
鄙道を傾ぎて来る秋日傘　茂呂　典正
まつすぐに雨突き刺さる枯木道　山内　健治
父の背の小さくなりし落葉道　山下あゆみ
飛驒に住み坂道多し草紅葉　山下　定子
尋ね来て道なほ遠し秋の暮　山田　凍崖
道冱(い)つや復興ちちと進まざる　与玖法破来
走り梅雨魚道をのぼる魚の影　米倉　和美

平手ふじえ　選

〈特　選〉

石狩の空が足りない真雁かな　青森　萬年和子

真雁は北極圏に近い繁殖地からカムチャッカ半島を経て、北海道石狩地方を中継地とし、本州の越冬地へと約四千キロを飛行する。帰るときもまた石狩低地帯等に集結し、再び北国へと飛び立つ。その数は十万羽を越す年もあるという。大自然を背景に、一途に生きる真雁の情景を活写した。

寒波来るロシア舟唄乗せて来る　埼玉　矢島　清

日本の寒波はシベリア地方で発達した寒気の吹き出しによって急激に低温となる現象。「ヴォルガの舟歌」の旋律のように、寒気の波が重く迫ってくる。「来る」のリフレインが効いて、北国の本格的な寒波到来をダイナミックに表出した。実感から生まれた的確な比喩には力がある。

……題詠「道」……

生業の白衣の道やクリスマス　佐賀　西久保　キクノ

看護師として生きる作者が想像される。街が色鮮やかなイルミネーションで輝きはじめる頃も白衣の仕事に心の弛みは許されない。「白衣の道や」とした潔い響きから、白衣を天職として受け止める作者の気概が見えてくる。季語の「クリスマス」に心情を託し、詩が生まれた。

〈秀　作〉

荒海や冬夕焼のあだびかり　石川　坂下信子
錠剤の立つてころがる今朝の冬　愛媛　曽我部剛生
さ湯に溶く子犬のミルク雪もよひ　愛媛　毛利喜子
艫綱の伸びて弛みて秋麗　秋田　石川明
雪足して大仏の膝丸めけり　青森　神繁雄
山ざくら仁王のゐない仁王門　岡山　高原晴子
細脛に四股踏む子らや柿若葉　神奈川　中村敬
義士の日や町に出て買ふ肥後守　茨城　増田宇一
雪来るか刃区（はまち）分厚き備前物　神奈川　宮岡弘
おとなしくなればゐねむり十夜婆　大阪　畠中俊美
含羞草ねむらせ通り抜けにけり　東京　小川美津子
賜りし一日土踏む二月尽　神奈川　前島康樹
二つ目の寿限無なめらか敬老日　東京　高山小百合
小春日や表彰されしいい歯の日　兵庫　大附多美子
むかご飯牛のせり市近づけり　宮崎　山下守
鶏絞めて囲む七輪年忘れ　神奈川　小塚信江
嵩厚くなりたる手帳年暮るる　富山　岡田康裕
目礼にかへす黙礼おぼろの夜　埼玉　新堀芳惠
船影を置かぬ海峡初明り　青森　萬年和子
口嗽ぐ水より秋の立ちにけり　三重　奥山功

……題詠「道」……

退職の指にチョーク粉水温む　栃木　下和田真知子
道東に流氷来し日寛解す　ポスニアヘルツェゴビナ　上原百合子
八十回忌母の墓へと小菊提げ　千葉　髙木ヤエ子
参道に刃物市立つ春祭　埼玉　武井猛
菜の花や海道ながき伊予の国　愛媛　森要子

〈佳　作〉

掲載は氏名五十音順です。

白菜のサクサク割られ核家族　秋庭　武司
親芋も旨いとおやじならば言ふ　浅野　公夫
短日の銀座の暮色惜しみけり　浅野　浩利
蝌蚪の紐揺れて幼の動かざる　浅見　智与
行列の伸びに伸びたり走り蕎麦　穴井　輝子
亡き母の座に妻の居て縁小春　荒木　信夫
冬日和国府の杜に唱歌聴く　安倍　和也
肉ばかり拾つて食ひて生身魂　井口　光雄
炎天の坂のぼりきてひとりかな　池谷　硬司
波音は豆をころがし村芝居　池田　綏静
指さしてゐて綿虫を見失ふ　伊佐治秀一
岩清水地球の息吹汲みにけり　石川　明
一天に声高くして初雲雀　板津　松男
日めくりの詩画集やさし寒見舞　市丸万由美
寒林や一基戦没学徒の碑　市村　栄理
冬空を大きく廻す鳶かな　井出久美子
眼のガーゼ外れる朝の寒さかな　伊東　明夫
秋の夜やゆつくり開ける硯箱　伊藤　竹代
ターナーの淡き色合ひ雪催　伊藤　哲
ロボットの愛犬と見る冬星座　井口冨士夫

秋深し一人の空の青さかな　茨木由己子
持て成しは焜炉で焼きし黍の餅　岩金　妙子
飛びたくて全速力の風ぐるま　岩水　節子
神妙な顔して叩く西瓜かな　岩本　弘
冬凪や灯離るる豪華船　江里口水子
きらめきて大きな鮎の釣れにけり　遠藤　操
荒川に怪魚の噂蚯蚓鳴く　大石　坦
月下美人開き狭庭を驚かす　大内田芳乃
蕭蕭と古城の松へ青鷹　大久保文夫
飛騨人の素朴な便り冬ぬくし　逢坂　紀子
ペンだこの消えて久しき冬初め　大野　兼司
白息の競り値飛び交う花市場　岡田　育子
白襟せて百葉箱の冬ざるる　岡田　有峰
盾となる武甲嶺に冬花火の輪　小鹿原君江
枯菊の括られしまま焚かれけり　奥村真由美
猪追ひて戻らぬ犬を呼ぶ谺　尾崎恵美子
引き幕の破れに目あり村芝居　尾崎恵美子
大菊を咲かせし母の長寿かな　小野トメヨ
寒紅梅谷戸の日和に綻びぬ　各務千枝子
鮭の川となりて激しき水の音　柏木ともみ

紅葉よりいでて紅葉の瀬戸の島　加藤　順子
船頭の追分節や散る紅葉　加藤　晴美
薄氷を割つて青空出しにけり　加藤　浩
桜東風卒寿の友が父見舞ふ　金谷ゆかり
百日の雪との暮らし始まりぬ　金子　照栄
夕風や枝に失意の武者絵凧　金子　熙
引く力踏ん張る力草むしり　金子　佳子
見学者数多はべらし雪吊す　上内　義則
庭石となりし石臼ちちろ鳴く　柄谷　せつ
立ち寄り湯帰りの釣瓶落しかな　川口　茂則
灯を消して雛の安らぎとり戻す　川副　康孝
朱印書く尼の細指初紅葉　河野　正海
流鏑馬の馬も祓ひて秋祭　川辺　谷平
山峡に煙ひとすぢ秋収め　岸　さなえ
考への決まらず一枝足す焚火　北橋　晁子
老犬の老犬を待つ秋日濃し　北原　信子
茶の花をこぼし明るき阿弥陀坂　北村　薫
天を突く裸木にある力瘤　北村タカ子
風花や絵本から犬飛び出して　木下ひろ子
木のベンチ石のベンチに秋の声　木原　登

新涼や寝ころんで読む一茶の句　久保　厚夫
沢内甚句三千石の夏蕨　熊谷　房子
風の子の念力失せて風邪籠　郡司　紀子
直売所藁で括りし初わらび　源通　清信
冬の海漁師無口に詰将棋　河野　重雄
風呂吹を崩せば湯気の笑まふごと　小柴　智子
義士の日のあつあつ蕎麦を啜りけり　小島　紅雅
春浅し縞を着ながす男の背　未　桜
初めてのやしゃご生まれる山笑う　小高　キセ
逝く母に此の世の桜咲きにけり　小谷　一夫
小走りに街尖り来る冬の来る　児玉リツ子
濁流の高さに汚れ猫柳　後藤　利夫
小春日やテニスボールの音弾み　小山寿美子
浜茹での蟹の湯気たつドラム缶　近藤　英明
蒼天に針のひかりの冬芽かな　斉藤登志子
家族集へり一本の庭の柿　齊藤　智子
波郷忌の風に真向かふ朝出かな　斎藤　博文
クリスマス古希迎えたるジャズトリオ　酒井　明子
停電や本当の夜の虫の声　坂上　晃
かたつぶり雑事の多き月曜日　坂口　和代
枯木星浜辺に山と牡蠣の殻　櫻井　波穂
一灯の伽藍奥より冬来る　笹岡紀代子

秋深し拭いて小さき母の顔　佐々木希世有
秋茜富士の風より生れたり　貞住　昌彦
初詣なかなか神に近づけず　佐藤　聡
滲みよき甲斐画仙紙や筆はじめ　佐野　明美
よもすがら赤城颪のおらぶ声　塩野　光子
大根一本きざみてほせば手のひらに　繁原　京子
雲を生み雲を広げて山眠る　志鶴　冨生
鴛鴦を端から数ふまた数ふ　芝田　太
頬杖の片手に余る秋思かな　渋谷　達磨
積み上げし歳月崩し秋出水　嶋野　智之
百歳へ健康講座冬温し　清水　清伺
革張の日葡辞典や南吹く　清水　良郎
廃校舎きつつき親子宿りおる　進藤　鳥人
ロボットに注文聞かれ十二月　菅原ちはや
マカロンの袋の軽さ冬うらら　鈴木　麻子
成長の証と恕す雛離れ　鈴木　計廣
呼ばずとも膝に乗る猫日記果つ　鈴木　武
蹴り上ぐる加賀の御空や梯子乗　瀬川　惠
鰯雲母校に消える農業科　関沢　洋一
着ぶくれて手振り大きくもの申す　関田　和子
鳥雲に何と世間の小さきこと　関根　瞬泡
老人の隠れ煙草や冬の園　瀬野　浩

からつ風阿蘇の噴煙よく見ゆる　園田　和子
先生の隣りに座りあたたかし　高岡　幸子
冬ぬくしゆるりゆるりと読み聞かせ　高崎しげる
木守り柿役目果して崩れけり　高瀬　千春
雨の糸ゆるくほどけて合歓の花　高野　知作
今生の禍福たつぷりちやんちやんこ　高橋　千恵
克明な昭和の日記曝しけり　高橋マキ子
託されて艶を増しゆく木守柿　高橋　玲子
秋晴れて海の匂いの駅につく　高松　眞弓
海胆を割く老斑の掌のたしかなる　高本よしえ
冴ゆる夜のハチ公いまも耳たてて　高柳　ちゑ
弁当はこころの手紙四月来る　竹下　和宏
焙煎の香る街角松の内　武田　本子
晩鐘のとどく竹藪寒雀　田島　貞子
黙々とロープ巻き取る祭あと　鷺　汀
文化の日足見えてゐる試着室　舘野　茂子
葱汁のあつきを啜る去来の忌　井出　悦子
撮影会着物モデルの菊日和　田野咲美子
春雷や加賀の山並目覚めたる　田村　峯子
蟬落つるかすかなる音爆心地　露木　伸作
AIと話しちぐはぐそぞろ寒む　出店智恵呼
おはやうと走る自転車霧の中　土井美恵子

筆置きて半紙の余白十三夜　戸塚　邦子
牝瓦も牡瓦も濡れ春の屋根　飛田　兼延
丁寧に畳む新聞年詰まる　友田　芙美
緑蔭や師は涙して選手誉め　寅屋　照夫
レコードに針を落して昭和の日　長井　良孝
新米や塩に語らす握り飯　中内伊美子
木守柿鳥あらそはず残しをり　馬上　絹代
火蛾を掃くことに始まる出羽の寺　中島たけ子
雑炊でしめてお開き同窓会　中島　保
常夜灯冴ゆる信濃の川堤　中島　利江
冬浪のしぶく岩屋にマリア像　中野　弥生
殿様も道具を運ぶ村芝居　中本きみよ
走る野火とどまる野火や草千里　中山　秀子
短日や動く歩道をなほ歩く　名越　紫音
新牛蒡細き香りをすつと抜く　西川　安子
遺したるもの百号の絵と冬帽子　西野　敏子
山眠る岬を真太き送電線　西村　圭子
葉牡丹の置かれ新居の顔となり　西村　久子
夕焼の手に掘り出さる火焔土器　西村　英雄
耳遠くなりて健やか夏のれん　西本　文子
ケーブルカー紅葉の谷をひろげゆく　西本美弥子
うれしい日薔薇大輪の御苑かな　西山　玲子

綿虫に漂ふ力ありにけり　能田　孝昌
日向ぼこ母そつくりの座り方　野口　圭市
山笑ふけふ解放の取水堰　野尻　瑞枝
時雨るるや思はぬ一会雨宿り　萩原　清
普段着の交じる茶会や文化の日　橋本　宥司
猫になる小さき手袋待合室　長谷川どのこ
昼寝の子夢こわさずに移しけり　羽立　和子
千年の大樹の下や飾売　浜田はるみ
虫売りの虫より上手く鳴きにけり　林　たかし
梅干の種のとんがり朝曇　はやし　碧
檀林の松の香立たすしぐれかな　原　瞳子
寒紅をひきて生き抜く顔となり　原田　熙恵
小春日や四人家族に影四つ　坂東　文子
下総に筑波ならいの吹き下ろし　菱木　良一
一葉忌紅のひと葉を栞とす　菱野としみ
麦を蒔く活断層の上に住み　人見　正
寄つてみただけと言ふ友暮の秋　風街ゆう子
しやりしやりと母のお手玉冬ぬくし　平尾美智男
鬱なぞる無碍な筆順目借時　平林　佳治
西空に残月河豚の袋糶　平原　廉清
山笑ふ足湯の足のひとならび　比留川佐智子
年の豆嚙める仕合せ九十個　福嶋　卓爾

交差点すとんと暮れて討入日　藤田美和子
赤かぶら干す湖越しの比良の山　藤原　照子
安眠とふ千金の刻木の葉髪　藤原　照子
天元の碁石つややか梅ひらく　不破　元之
新刊の立ち読み釣瓶落としかな　正木羽後子
浦日和波音届く掛大根　益田満寿美
遠雷やへそ隠す子が窓閉めて　松井　恒夫
八月の回天の海花供え　松浦美智子
夫の声とどくあたりに蕨折る　松尾　一子
みちのくの風が極める凍み豆腐　松見喜美子
身の丈に生きていただく蕪汁　松本八重子
高原の秋空高く開けてあり　三浦　一志
もう跳べぬ小川の先の蕗の薹　御江　恭子
介護士の仮眠勤労感謝の日　三井　和子
秋日傘悲しい時は低くさす　三原　利子
不揃ひの屋台の椅子や初しぐれ　宮崎タエ子
揺れて着く一輛列車稲の花　宮崎　玲子
大根も治下(じげ)の訛を聴き育つ　宮地昭一郎
復旧の河原を飛球冬青空　宮本いずみ
花野行く雲は力を抜いてをり　三吉　昌子
もう誰も遊んでくれぬ雪兎　椋本　望生
武甲嶺や新酒の頃を稽古笛　村田　寛文

冬蜂のおもちやのやうな艶放ち　村田　牧美
落葉松の梢の上の冬日かな　村橋　克雄
待ちわびし一陣二羽や鶴の里　村橋　克雄
温顔に据りよろしき冬帽子　望月　清彦
三瓲てふ鯱のジャンプや秋高し　本池美佐子
潮風や壱岐の浜辺の野紺菊　桃原　晴美
冬晴や鳥の図鑑をポケットに　森　悦子
にぎわいの天に地にあり六連星　森　健二
信号のカツコウと鳴る小春かな　森　静子
寒いぞとペット気づかふ夫の声　森　章子
図書館の貼紙多し文化の日　森　靖子
寒柝のやや間のびして花舗点る　屋代　義男
狛犬の阿の口ふさぐ蔓枯れて　安岡　房子
たのしみの風船ダーツケアハウス　保田　昌男
捨てるとは覚悟すること焚火かな　矢部　友美
おにぎりの差し入れ秋の野点かな　矢部　友美
姿良き島の端明り野水仙　山内　健治
冬晴や夫の引きぬく力草　山崎かず子
八十路なる母へピンクの日記買ふ　山下あゆみ
山の湯に挽き臼ひびく走り蕎麦　山田　凍崖
プランターにひまはり咲かせ町住ひ　山野　節子
西口は陽の溜り場所冬木の芽　山之内喜七

物音を閉ぢ込めてゆく夜の雪　山本　則男
機関車の打検の音や星冴ゆる　湯田　一秋
鶯の一声聞きに戻る橋　横山　洋子
有り難うと言える倖せ日日草　吉井　功
神迎鼓の一打に闇動く　吉浦　増
極月の「令」の一文字大書さる　吉田　敦子
お涅槃に口なめらかな絵解僧　吉田　靜子
達磨市器量で決まる火打石　吉元　京
土を踏む音の湿りや春隣　ありかえばん
賢妻が立てる男の祭りかな　渡辺　一甫

……題詠「道」……

その中にローマ字もあり蜷の道　赤峰ひろし
天道虫結び目固きボッカの荷　朝倉垂代子
夏の霜父はこの道征きしまま　阿部風々子
猛暑日や身ぶり手ぶりで道教へ　新井　忠彦
花野道ピエロを真似て作る影　石井　東泉
隧道の果ての秋灯平家村　市村　栄理
久闊の村道明り彼岸花　今井　禮子
時雨るるや熊野古道も野仏も　印出井慶子
しるべ無き道を越境飛来鴨　風　車
山越えの一本道消え海女の浜　遠藤　郁子
現の証拠はや一群の野道なる　太田　正之

刈田道前の鴉に歩を合わす　大竹　茂
法隆寺出て法起寺へ柿の道　岡田　春人
柔道着の汗の匂ひで勝ちにけり　小俣　友里
夕焼くる道は旅ゆく思ひにて　掛村おさむ
冬ざるる大潟村へ一本道　片岡　嘉幸
道中も楽しみにして美術展　金谷ゆかり
滴りや熊野古道は輿の幅　川口　和子
秋澄むや沖よりつづく神の道　川口　茂則
落葉道わたし一人の宇宙なり　川崎　和子
万歩計目標果す花の道　北村タカ子
葉桜の万の声浴ぶ通学路　木原　登
どこまでが鎌倉古道草紅葉　草野　准子
看取り道水仙二本摘みにけり　工藤　進
明易の雲踏んで行く縦走路　國井免独斉
雪五尺足跡のみを道となす　久保　厚夫
大西瓜重さクイズや道の駅　源通　清信
道化師の寒き笑顔に喝采す　小嶋　恵美
参道の蹴込の高し千歳飴　小島　紅雅
百千鳥喜寿は白寿へ道半ば　小塚　信江
住み古りて道道楽し青蜜柑　小西　貴子
落葉道夫が歩めば夫の音　小林志津江
掛額に道の一字や牛鍋屋　小林　道子

生垣のねこの抜け道石蕗の花　笹野　久代
どの道もポスト遠かり秋の蝶　実沢　愛子
伊豆相模わかつ峠や冬野道　佐野　明美
冬の日の江ノ電一駅を歩く　嶋村　博吉
白線で春めく道や過疎の街　下地　雄三
噴煙をのぞむ山道濃りんどう　新宮すゑ子
登山道軍手で拭ふ道標　鈴木　経彦
末枯の道うらがれの野に出でし　鈴木美智子
杉落葉下見古びし弓道場　関沢　洋一
歌垣より入る山辺の道涼し　髙橋起世子
鎌倉へ続く古道や野紺菊　武井　猛
帰りには早苗田なりし散歩道　武井　猛
夏炉焚く牛方宿や塩の道　竹中　友弥
道違へ出会ふ僥幸初ざくら　舘野　茂子
なんとまあ車の席へ道をしへ　井出　悦子
苦瓜のぶら下る道潮風の道　田野咲美子
年の瀬や女人の混じる道普請　飛田キミ子
街道の霰の跳る石畳　内藤こと代
坂道は橇の遊び場昭和の子　中島　みつ
夜神楽や神の降り来る道開く　永田タヱ子
道問へば手袋の手で教へくれ　仲屋　三造
夕霧も鯉こくも濃き信濃路越え　難波美枝子

車椅子の母よく喋り花の道　西本美弥子
赤のまま人住む処道のあり　能田　孝昌
秋鯖を同窓会の帰り道　信澤智惠子
柔道部今日はサッカー天高し　萩原　豊彦
参道の玉砂利光る風光る　平原　廉清
戦あるなと冬田道歩くなり　平見　翠玉
寄り道の父のみやげの通草かな　房前和加子
迷走か思ひ通りか蜷の道　藤根　豊
鴨親子道横断の試練かな　藤山　隆
黄帽子の浮き沈みして花野行　馬渡　清蔵
木の芽風女工哀史の峠道　宮沢　一郎
道具屋の卒寿の鬚や冬うらら　宮坪　勝美
鳥飛んで刈田の道の楽しさよ　三吉　昌子
籾袋運ぶ女生徒刈田道　横山　基詞
獣道ぬた場へ下る木下闇　吉田　晃延
走り梅雨魚道をのぼる魚の影　米倉　和美
八十路なお八起の途上実南天　若林　佐嗣

松尾　隆信　選

【特　選】

人げんにマイナンバーや原爆忌　山口　松浦　美智子

二十世紀の文明の進化は、原爆を生み出した。そして二十一世紀は、情報の管理、人の管理がコンピューターで徹底されつつある。科学技術や文明の高度化が人間の幸せとは直接つながるものではないのは明らかなのだが……。地球温暖化への対応すらできない現代文明。大きなテーマの句。

日向ぼこ老人ひとり感光す　静岡　伊藤　孝一

感光とは、物質が光に反応して科学変化を起こすこと。かつて、日光写真という子供の遊びもあった。その遊びをした少年も今は老人。過去の記憶を印画する感光だけでなく、超高齢化社会を生き抜いて行くエネルギーを日向ぼこで、太陽から吸収しているのだ。それを感光と表現したのだ。

……題詠「道」……

滴りや熊野古道は輿の幅　神奈川　川口　和子

熊野三山への参詣の道が、熊野古道。かつては上皇や公家達も盛んに参詣した。輿に乗る貴人達の姿もあったであろう。山中の道としては広い道幅に往時の参詣の列を想ったのだ。滴りのある崖の前でも、しっかりと輿の通る幅は確保されている。古道と輿のこ音の響き合いが涼やか。

【秀　作】

宅配の青年枇杷の花を誉め　東京　渡辺千佐子
拭きあげし二重硝子や栗名月　福岡　藤村　義治
子を待ちて大つごもりの灯は消さず　神奈川　安藤　玲子
巫女募る貼り紙のあり神の留守　茨城　関沢　洋一
ふる里の日暮れの匂ひ吾亦紅　東京　印出井慶子
寄つてみただけと言ふ友暮の秋　福岡　風街ゆう子
大皿を一枚買ひて年用意　千葉　石橋　徹生
虫売りの虫より上手く鳴きにけり　東京　林　たかし
色かへぬ松と水面の金閣寺　愛知　正木羽後子
日向には日向の匂ひ日向ぼこ　大阪　角　雅行
抽斗のまるめろの香や稿仕上ぐ　秋田　坂　一草
川底の冬日をつつく雑魚の群れ　埼玉　棚沢　悦
冬銀河たんすの底の母子手帳　大分　松本みゆき
箸並べ膳の整ふ夜の秋　兵庫　三井　孝子
梅干の種のとんがり朝曇　岐阜　はやし　碧
山ざくら仁王のゐない仁王門　岡山　高原　晴子
天狼や産院の灯の煌々と　埼玉　武藤　三山
採血のナース深爪冬ぬくし　鳥取　板倉　弘明
葱束のきゆきゆと鳴るや猫車　宮城　佐々木希世有
風花や高速バスは隧道へ　青森　福士　謙二

……題詠「道」……

朝時雨乾き始めるアスファルト　島根　今村登希子
畦道のほどよき湿り春立てり　東京　野尻　瑞枝
木洩日に黒百合臭ふ獣道　和歌山　廣瀬　和男
夕映えの消ゆる早さや刈田道　埼玉　吉田　静子
枯木道イブモンタンを口吟み　奈良　辻　肇

【佳　作】

掲載は氏名五十音順です。

白狐舞ふたびに山車揺れ里祭　相沢正志斎
絵の具溶く銀杏落葉を浴びながら　四十物敦子
久々のお国訛や菊膾　秋山　常雄
親芋も旨いとおやじならば言ふ　浅野　公夫
豚汁に秋刀魚の塩焼き白ご飯　浅野　俊治
短日の銀座の暮色惜しみけり　浅野　浩利
秋光を溜めて松葉の雫落つ　安藤　汀
干拓地跨ぎ海へと冬の虹　飯尾美智子
秋立つや停車場の椅子色褪せて　五十嵐利明
読みさしの新書に挟む柿若葉　五十嵐　守
炎天の坂のぼりきてひとりかな　池谷　硬司
猫の恋町中に知れ渡りけり　池田勝のり
花種を蒔くと記して母子手帳　池田　忠山
波音は豆をころがし村芝居　池田　綏静
艫綱の伸びて弛みて秋麗　石川　明
探梅の起伏の向かふ海の碧　石川婦美子
母の選る着物あれこれ初鏡　石田　わ子
放たれて身震ひ一つ狩の犬　石松　禎佑
冬空を大きく廻す鳶かな　井出久美子
初夏や母の形見のミシン踏む　伊藤　茂子
廃線の雨のホームに蔦紅葉　伊藤　孝義
満月やどこかで窓を開ける音　伊藤　忠
ふるさとに暮らす仕合せ石蕗の花　井上由美子
碇泊の巨船の明かり夜の秋　井口冨士夫
着ぶくれて恋か介助か手をつなぐ　今井喜久江
冬至湯に顎までつかり父似かな　筑紫　太郎
雪女故郷に美人コンテスト　岩田　勝
文化の日実験装置は休まない　岩村ときわ
寺二つ有りて花野の過疎の村　植木　静恵
煤払伝へることを声にして　牛久　有子
若葉風時間ぎりぎり迄足湯　梅澤　節子
晩秋や包丁を研ぐ孤独な背　榎本　波子
塩こしよう定位置にある無月かな　蛯原　愛子
海光へなだるる岬野水仙　江里口水子
夕星（ゆふづつ）の導く家路暮早し　大石　知子
荒川に怪魚の噂蚯蚓鳴く　大石　坦
安泰や餅に橙据り良き　大浦　信子
原つぱに遊びし友やおでん酒　大木　和親
かるたとり妹負けず嫌ひかも　太田かつ子
沿道の日本国旗や冬ぬくし　大沼　遊山
反り返るトタンの廂紅葉寺　大野　兼司
警官の指差す先の帰り花　大場　和晴
白息の競り値飛び交う花市場　岡田　育子
冬ぬくし人を拒まぬ自動ドア　岡田　邦男
かまきりの螺髪に遊ぶ昼下り　要　へい吉
両脇に石蕗を咲かせて神の道　岡野さくら
集ひたる子らの談笑葡萄食む　岡村　光博
夢語る子供のやうに麦踏まむ　奥田　豊
結局は妻が立ちたる掘炬燵　奥村　利夫
枯菊の括られしまま焚かれけり　奥村真由美
廃校も空家もありて山粧ふ　小田原やちよ
子の杵に手を添へ共に餅を搗く　小野　宗利
クレヨンに昭和の香り山粧ふ　掛村おさむ
無言館出でたる耳に虫の声　柏木ともみ
秋霖や道にはみ出るごみ屋敷　加藤　重喜
遠目にも聖誕祭の街明り　加藤　順子
山裾に新築の家そばの花　加藤　貴子
初雪や織部の皿に少し盛る　金谷　保
初旅やウルマンの詩（うた）口遊む　河井　功夫
朝摘みと誇らしげなり萵苣三個　川上　虚承

パレットに朱色の足りぬ柿紅葉　川口　和子
立ち寄り湯帰りの釣瓶落しかな　川口　茂則
侘助の咲き継ぐ白さ妹は亡し　川澄　陽子
車座の鯨舟歌秋祭　川辺　谷平
媼五人みな未亡人鱧料理　神戸恵美子
千曲川大洪水の年暮るる　木川喜美子
小春日や鉄砲玉の亭主待つ　北橋　晃子
木のベンチ石のベンチに秋の声　木原　登
ラガーマンの腕ほどもある甘藷かな　木俣　道子
折鶴の再生名刺広島忌　君塚　房子
卓球のごとき会話や夏近し　木村　夕里
とうさんはジャムパンが好き冬籠　杏　冬夏
新涼や寝ころんで読む一茶の句　久保　厚夫
秋思かな針箱にある我が旧姓　源通ゆきみ
父と母同じ位牌や原爆忌　小谷　一夫
電飾の消えて聖樹の眠りけり　児玉　胡餅
美術館出て春雨に濡れてゆく　後藤　利夫
捆まれし髪切虫の憤り　後藤　利夫
ラグビーに沸く列島や鳥渡る　後藤　史子
ゐのこづち蹴飛ばしてゆくスニーカー　木幡　嘉子
即興の台詞大受け村芝居　小林　七重
母の背の次女が寝て持つ千歳飴　小林　寛久

水鳥に等間隔の流れあり　小松　清
競漕の身を倒しきるところまで　小松　光希
水占に文字浮かびくる小春かな　斎藤　洋子
自ずから軍歌が口に敗戦忌　齋藤　義雄
雪つぶて躱せる保母の右左　坂　一草
独り居の夜はまるくなり蜜柑剝く　坂口　和代
玄関に子の迎へある聖夜かな　坂口　智弘
小夜時雨闇より土の匂ひせり　崎谷　弘子
横たはる破船のきしみ冬銀河　桜庭　恵
郷土館の裏を流るる紅葉川　笹野　青陽
ひょいくるっひょいくるっとかいつむり　笹淵　雷虎
三匹の恋猫の声重なりぬ　貞森　修
秋の宿訛りの残る標準語　佐藤　敬子
快慶仏の鼻の先より冬に入る　佐藤　茂
体験の虚実は問はず生身魂　佐藤貴白草
立冬や湯呑み両手に包み込む　佐藤　容子
仲良しの証しにあげる竜の玉　里村　梨邨
滲みよき甲斐画仙紙や筆はじめ　佐野　明美
夕焼や凜とペダルを漕ぐ少女　佐野　延子
青田風光が囲む一軒家　佐野　無色
茶の花や手提げに縫ひし妣の帯　塩谷多鶴子
博物館へ長蛇の列や奈良の秋　芝　由雄

鴛鴦を端から数ふまた数ふ　芝田　太
初鴨の着水首を伸ばしきり　嶋治久美子
ひらがなの名札を胸に新入生　島津　義浩
絵屏風の虎に泣き出す幼児かな　島村　實
林檎もぐ青空ぐいと引っぱって　清水喜代美
耳に痛き母の小言や酬し柿　清水須寿代
革張の日葡辞典や南吹く　清水　良郎
ふらここに二人乗して兄妹　下瀬　晃子
島浦に鹿尾菜干しゐる母子かな　下田あつ子
親友は半農半漁みかん来る　下和田真知子
春光のとどきて微笑木喰仏　神　繁雄
ロボットに注文聞かれ十二月　菅原ちはや
街角の移動図書館薔薇香る　杉﨑　淑子
霜柱さくさくざくつと踏む子かな　鈴木　圭子
大嘗宮少し離れて石蕗の花　鈴木　砂紅
木枯しや石となりゆく道祖神　鈴木　澄雄
秋風をまとひ民生委員立つ　須田　隆
電線の鴉の背負ふ雪催　須藤　光子
医者嫌ひ薬嫌ひやちやんちやんこ　角　雅行
朝寒や柱時計の音七つ　清野　幸夫
本の帯少し破れてゐる小春　関　雅己
右左眼の色ちがふ寒の猫　関　美奈子

風水害災厄の年暮れんとす　瀬野　浩
雪折の一瞬を見し畏れかな　瀬端　忠男
錠剤の立つてころがる今朝の冬　曽我部剛生
レコードのジャケット褪せるレノンの忌　高石まゆみ
先生の隣りに座りあたたかし　高岡　幸子
しなやかにつきくる鯉や十二月　高木　敏子
克明な昭和の日記曝しけり　高橋マキ子
空色の切符握りて帰省かな　田上　勝清
金縷梅の花ほどけゆく切通し　高柳　ちゑ
上州と武州をつなぐ虹の橋　武井　猛
五日はや歯医者の椅子に口をあけ　武市　宣子
束の間の子等の沈黙鵙の贄　竹田　清美
椅子ふたつ並べ湖畔の星月夜　竹見かぐや
晩鐘のとどく竹藪寒雀　田島　貞子
絹市の名残の路地の実万両　田嶋　利子
手相見の小さき明りや雪催　舘野　茂子
一木に御籤のごとく椋の群　井出　悦子
奈落とふ涼しき処芝居小屋　田中テル子
遠雷や信号待ちの乳母車　田中　祥江
流星の一閃テールライトめく　田辺　秋花
吊されし赤い手ぶくろ無人駅　谷　和子
涅槃図の中に今年の干支探す　谷口　智鏡

春水を塊で吐く河口堰　田村　清美
林檎むき円周率を思い出し　田村　利宣
割烹着美人と言はれ天高し　為成　央子
亡き母の部屋広びろと秋簾　千原　道子
大根を一本さげて新居訪ふ　塚田久仁栄
生きてゆく私を詠んで去年今年　津田　京子
手児奈道色なき風の通り道　露木　伸作
飼い主を待ちて月下の犬となる　戸田　絢子
入選の句を読み返す年の暮　戸田　敬身
空蟬の琥珀色なる記憶かな　都丸　浩美
丁寧に畳む新聞年詰まる　友田　芙美
子ら集ふ日や大鍋におでん煮る　内藤こと代
靖国の花の下より盲導犬　中川　湖洲
八月や孝行せよと兄の遺書　中條今日子
言い分を交互に聞いて扇風機　中田　光介
川霧のなかを漕ぎ来る渡し舟　永田　満男
亡き妻の手袋五指をはめてみる　中田　實
殿様も道具を運ぶ村芝居　中本きみよ
大根を切るや遺言急がねば　新津　黎子
前うしろお盆の顔の揃いけり　西方　吉弘
秩父一揆のことも遥かや後の月　西野　敏子
小鳥来る十一階に住む暮し　西山　玲子

人込みを避け人込みに入る秋思　日光　正春
赤富士を仰ぎ大きく深呼吸　根本　國男
綿虫に漂ふ力ありにけり　能田　孝昌
噴水の止まり俄に街の音　能田　孝昌
なんとなく心定まり秋刀魚焼く　野田　彰子
爽やかや噂話の外に居て　萩原　豊彦
燕くる開けっ放しの農具小屋　橋本　菊乃
普段着の交じる茶会や文化の日　橋本　宥司
右左靴違ふ子のしやぼん玉　羽立　和子
五百年漢方鬻ぐ箱火鉢　畠中　俊美
残菊や笑ふ羅漢に泣く羅漢　服部　正遊
北斎の藍色の如山眠る　羽田　孜子
千年の大樹の下や飾売　浜田はるみ
木の実雨静まり返る無言館　濱名　博光
蝦夷開拓史薯の花満目に　濵野　裕子
まづ供ふ被災の土地の新米を　林　富佐子
廃屋とみえて人住む蔦紅葉　原田ミチ子
清張をひと息つけば虫の声　平岡　啓助
黒揚羽監視カメラをよぎりけり　平野　鉄哉
褒められも食べられもせず柿たわわ　平林　佳治
音読が今日の宿題曼珠沙華　平林　佳治
冬凪や平家滅びし海滔々　平原　廉清

山笑ふ足湯の足のひとならび　比留川佐智子
山荘に名残の萩のこぼれけり　比留間加代
蓮根掘り呼ぶ声泥にまぎれけり　藤岡　定子
免許証返し新調夏帽子　藤野　武彦
時雨忌や京へ気ままな二人旅　古川　照子
三井寺の強訴の如き大くさめ　保坂萌太郎
春風や又も生かされ退院す　星野　光子
話したきこと話せずに落花生　前畠　一博
旅の朝コップに活けし草の花　増田　幸弘
孫に問ふ卒論準備おでん鍋　町田　楽人
夫の声とどくあたりに蕨折る　松尾　一子
人生の集まっている日向ぼこ　松本八重子
この町はどこへ行つても水澄めり　丸山　与作
もう跳べぬ小川の先の蕗の薹　御江　恭子
咲き匂ふその秋草の名をしらず　宮山　輝文
冬夕焼貨物列車の長々と　三好　弘文
秋の蝶ゆるりゆるりと羽ばたけり　向井　麻代
もう誰も遊んでくれぬ雪兎　椋本　望生
推敲の時の過ぎゆく良夜かな　持田　市朗
風邪癒えて忽ち利かん気の子なり　望月　清彦
裏木戸のぎいと軋みて石蕗の花　百田登起枝
乾びたる側溝に猫クリスマス　百田登起枝

憂さと愚痴咽に流す新走り　森　健二
赤とんぼ令和の空に馴染みたり　森　静子
図書館の貼紙多し文化の日　森　靖子
冬帝の祝意ティアラを輝かす　森田　英子
寒柝のやや間のびして花舗点る　屋代　義男
冬の雨唇にふれ指にふれ　矢部　友美
シベリアの兵たりし父雪しまく　山口　楓子
何もなき沖を隠して冬霞　山崎　馨
爪立ちて結ぶ神籤や冬日和　山崎　馨
啓蟄の水の飛び出すホースかな　山中　順子
濁流は地球の臭ひそぞろ寒　山之内喜七
捨てて来し村まんさくの咲く頃ぞ　湯田　畊道
八十八夜開く手擦れの農日誌　湯田　畊道
さつと来て飛石ぬらす初時雨　横山　基詞
捨案山子なほピストルを撃つ構へ　吉田　晃延
しぐるるや敦の駅の西東　吉田かずや
むかご飯太古の香りするやうな　吉竹　順子
ペンギンの腕輪の光る夏の暮　吉村　賢次
春の雪払ふ音して女客　頼経　素風
仏蘭西語の通訳します雪女　渡辺千佐子

……題詠「道」……

尾道の坂は迷路や猫の恋　秋山　観水

空缶に小菊一本道祖神　浅野　重子
武道場最後の稽古息白し　荒　木
道塞ぐほどの保護者や大試験　飯泉善一郎
地下道の足音せわし十二月　板津　松男
隧道の果ての秋灯平家村　市村　栄理
道草の愉し春田の畦伝ひ　筑紫　太郎
ちらり見て大き熟柿や裏の道　牛久保悦子
颱風禍杉の葉隠す木道坂　内海　洋子
入相の鐘に和らぐ恵方道　及川　源作
巡礼や雪解け道を一列に　大上　修美
落葉踏む道は坂東札所へと　大寺千恵子
霜の道句会場へと急ぎけり　大西　周
道中も楽しみにして美術展　金谷ゆかり
秋深き川面に映る鳥の道　菊地しをん
釣瓶落し近くて遠き帰り道　北村タカ子
岩稜にペンキの印登山道　君塚　郁子
踏みしめて上る坂道帰り花　木本　七恵
畦道や東に白き冬の月　工藤　昭和
劉生の道きらきらと五月来る　河野　悦子
帰りには大根も買う道の駅　小平　貞
木枯や道にぽつんと占い師　小橋　辰矢
ここよりは奥の細道そばの花　斉藤　粛江

小袋の新米光る道の駅　佐藤　正博
葛咲くや右さらしなの道標　佐藤　勝
爽籟や仲睦まじき道祖神　佐野　涌子
道半ば逝きし息子や心太　佐保田明子
初時雨バスはこの先峠へと　島田　容子
俊寛の配流の道や鷹渡る　白男川孝仁
職退いて妻にしたがふ萩の径　代田　雅文
旧街道梨売る婆の膝に猫　神保ミツエ
年の市香具師の口上道塞ぐ　角　雅行
会釈して道ゆづり合ふ紅葉狩　多賀与四郎
田圃道蛙の声と散歩する　髙野　彦作
車椅子押す坂道にえのこ草　高松　秀夫
参道に刃物市立つ春祭　武井　猛
鎌倉へ続く古道や野紺菊　武井　猛
夏炉焚く牛方宿や塩の道　竹中　友弥
銀の道の行方や蝸牛　竹見かぐや
農道は拡張工事麦の秋　田村サキ子
塩の道街中抜けて枯峠　永田　滿男
ふるさとに広き空あり恵方道　新堀　芳惠
道標どちらへ行こうか赤蜻蛉　西島　晴治
枝付きの柿も並べて道の駅　西村　久子
忠敬の行脚の道や草紅葉　野口　久子

狐顔狸顔夜の落葉道　萩原　豊彦
白糸の滝はこの先道をしへ　馬場　弘光
わたしにはわたしの歩幅十二月　風街ゆう子
寒菊の手向けられたる道祖神　平林けい子
足もとに吹かれて来たり冬の蝶　福岡　園子
遠花火人来ては去る歩道橋　福嶋　卓爾
秋灯下それぞれ違う趣味もちて　藤野　慧子
振り返る道に夕日の草紅葉　渕野　栄子
道普請共に移動の焚火缶　古川よし秋
道を説く友の白髪や濁り酒　増田　幸弘
岐れ道ばかりだつたと生身魂　松本　逸朗
狛尾草裏参道の和合仏　的場　武子
子供等の近道となる刈田かな　丸山　与作
雪晴の道まつすぐに続きけり　三浦　和代
行くほどに道現はるる枯野かな　三橋　順子
露店の灯ともる参道除夜詣　宮岡　弘
木の芽風女工哀史の峠道　宮沢　一郎
寄り道はいつものパン屋小鳥来る　宮田　一代
冬ざれや獣道いま風の道　武藤　洋一
ふりむけば夢二の気配花野道　目黒　輝美
桐一葉屋根付橋へ向かふ道　妻鳥　弘子
ハンドルを大きく切って冬紅葉　百田登起枝

立飲みの酒肆の裏道星涼し　桃原　晴美
切通し祭囃子の風にのり　諸星　泰子
上代の足柄古道すすき原　藪田　拓司
道行きや御捻りの飛ぶ村芝居　山口　勝
獣道ぬた場へ下る木下闇　吉田　晃延
参道の出店楽しむ初詣　吉竹　順子

ＮＨＫ学園生涯学習フェスティバル
第３回誌上俳句大会
入選作品集
令和二年三月十日発行
編集　ＮＨＫ学園
発行　〒一八六-八〇〇一
東京都国立市富士見台二-三六-一
電話　〇四二-五七二-三一五一(代)
印刷　明誠企画株式会社

©2020　ＮＨＫ学園
ホームページ　https://www.n-gaku.jp/life

作品集の作成にあたっては、あきらかな誤字・脱字以外は、原作のまま掲載いたしました。
誤植など不備な点がございましたらお許しください。
また落丁本はお取り替えいたします。

●●大切に作りためた俳句や短歌をお持ちの方へ、ご提案です●●

NHK学園
受講者作品集

あなたの作品を「本」にまとめてみませんか

NHK学園では、自費出版のお手伝いをしています。

- 美しく装丁されたあなただけの句集・歌集は、一生の思い出です。あなたの人生の軌跡を、家族や友人、身近な大切な人へ伝えられます。
- 表紙を好きなデザインや写真で飾り、講師の解説文も入れて…最高の一冊を作りましょう。
- 出版にあたっては学園講師や編集スタッフがアドバイス、全力でサポートします。
- 出版費用は応相談。人生の記念として納得のいく一冊を作りたい場合、皆さまのこだわりやかなえたい内容によって費用は本当にさまざまです。ご予算・ご希望をお聞かせください。
- お一人一時間の「個別相談会」も各地会場で実施中です。（参加費無料・要予約）ご都合がつかない方、ご来場が難しい方は、お電話やお手紙・FAXでのご相談も随時承っています。

自費出版された方の句集・歌集の例（一部抜粋）

句集

句集「牡丹咲く」（中面）

歌集

第二歌集「海のない町」（中面）

2020年 NHK学園 自費出版個別相談会 参加費無料 事前予約制

開催日	開催地	会場
3月13日（金）	名古屋	名古屋会議室 名古屋駅前店（JR名古屋駅より約500m）
4月 3日（金）	市ヶ谷（東京）	アルカディア市ヶ谷（私学会館）（JR中央線 市ヶ谷駅より約150m）
5月22日（金）	博多（福岡）	リファレンスはかた近代ビル（JR博多駅 筑紫口より約300m）
9月 4日（金）	市ヶ谷（東京）	アルカディア市ヶ谷（私学会館）（JR中央線 市ヶ谷駅より約150m）
10月16日（金）	大阪	イオンコンパス大阪駅前会議室（JR大阪駅 南口より約450m）

時間枠（先着順） ①10:30～11:30 ②11:30～12:30 ③13:30～14:30 ④14:30～15:30

※参加希望の開催日、開催地、時間枠とともにお名前、お電話番号、ご住所を下記あてご一報ください。追って担当より詳細についてご案内いたします。
※原稿をお持ちで、相談会へのご来訪が難しい方はご連絡ください。状況によってはこちらからお伺いします。
※NHK学園国立本校（東京・国立市）では常時、個別のご相談を承っております。（要予約）

お問合せ NHK学園 自費出版編集部 ☎042-572-3151(代)
FAX 042-572-0061
〒186-8001 東京都国立市富士見台2-36-2

ＮＨＫ学園　第３回誌上俳句大会入選証他専用額・トロフィーのご案内

「第３回誌上俳句大会」ご入選おめでとうございます。ご入選の記念にいかがでしょうか。

≪入選証≫　１通　1,800 円

＊Ａ４判（297×80 ミリ）でお届けします。
＊切り離して短冊にすることが出来ます。
＊おおむね１か月でお届けします。

▼入選証

入選証を切り離して短冊掛けに入れた見本です。

①短冊掛け（青）

≪専用額≫

①短冊掛け（青）
材質は和紙、壁掛け用です。
１枚　1,700 円（税・送料込）

②額（クラシックゴールド）
上品なデザインで卓上・壁掛け両用です。
１枚　2,700 円（税・送料込）

②額（クラシックゴールド）

≪トロフィー≫

作品をトロフィーにお彫りいたします。
１つ　14,000 円（税・送料込）
＊専用申込書をお送りください。郵便局からの払込票をお届けします。
ご入金確認後からお作り始めます。お届けまでに１か月ほどかかります。

▲トロフィー

キ……リ……ト……リ

令和２年　ＮＨＫ学園　第３回誌上俳句大会　トロフィー専用申込書

ご住所　〒　　－

お名前 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　電話番号 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

掲載Ｐ	選者名	賞名	作品（全文を記入してください）	数	金　額

お申し込み方法　①または②をお選び下さい。

①普通為替または定額小為替の場合

下の申込書に必要事項を記入し、為替（郵便局で購入）を同封して、封書でお申し込みください。

※為替には、何も書かないで下さい。

②郵便振替の場合（払込取扱票そのものが申込書になります）

郵便局で取り扱っている払込取扱票の通信欄に ⑴大会名、⑵作品の掲載ページと作品全文、⑶枚数、⑷選者名（希望の方のみ）、⑸賞名、また短冊掛け・専用額を希望の場合には ⑹商品名、⑺数量を必ず明記してください。金額欄に合計金額を明記して、下記の口座へお振り込みください。

入選証および専用額トロフィーの申込先・連絡先

〒186-8001（住所記入不要）

ＮＨＫ学園教材サービス
第３回誌上俳句大会入選証係
TEL 042-572-3151（代）

← **切り取って封書のあて名にしてください**

＜郵便振替の専用口座＞

口座記号番号	
00190－7－ 563608	
加入者名	NHK学園 教材サービス

※ いったんお申し込みいただいた後のご返金はいたしかねますので、ご了承ください。

※ 郵便振替の場合、下の申込書及び振替払込受領証のご郵送は必要ありません。

※ 申込書にはお名前、ご住所、電話番号をお忘れのないようお願いします。

キ……リ……ト……リ

為替専用　令和２年　ＮＨＫ学園第３回誌上俳句大会　入選証および専用額申込書

名　前	フリガナ	受講者番号
住　所	〒	
電話番号	－　－	

○入選証

掲載誌ページ	選者名（希望の方のみ）	賞名	作品（全文を記入してください）	単価（1枚）	枚数	金　額
				1,800 円		
				1,800 円		
				1,800 円		

◆特選・秀作・佳作の作品には希望される方のみ、選者名が印字されます。

◆同じ句を複数の選者から選ばれた場合は、選者別の発行（１選者１枚）になります。ご希望の選者名を明記してください。
４枚以上希望される場合にはお手数ですがコピーをしてご記入ください。

○専用額　※　専用額には入選証は含まれません。

短冊掛け（青）	数　量	1,700 円×　　枚	金　額	
額・クラシックゴールド	数　量	2,700 円×　　枚	金　額	

合計金額 ＿＿＿＿＿＿ 円　を為替で同封します。

※　振り込みの場合は、この用紙のご郵送は必要ありません。

実作力アップコース

正しい文法を知る　俳句 文法のツボ

●苦手意識を持つ方が多い「文法」。
このコースでは、文法の「ツボ」を効率よく学ぶことができます。句づくりに必要な文法に絞った俳句実作者のための学習内容です。

●リポート課題は３回。各リポートには作句課題がありますので、テキストで学んだ知識が実作で使えているか確認できます。

上級者のためのコース　俳句倶楽部

●俳壇の第一線で活躍中の講師によるワンポイント・アドバイスと、会員同士の誌上句会を楽しむ、俳句上級者のためのコースです。大会や雑誌の投句で、より上位の賞を目指す方におすすめです。

ワンポイント・アドバイスが受けられます

ワンポイントアドバイス講師
（2020 年 3 月）

井上康明
「郭公」

岩岡中正
「阿蘇」

片山由美子
「香雨」

小浜杜子男

高野ムツオ
「小熊座」

寺井谷子
「自鳴鐘」

西村和子
「知音」

三村純也
「山茶花」

●受講期間１年（自動継続）
●リポート提出９回（ワンポイント・アドバイス投句５句×４回、誌上句会　投句２回、互選２回、コンクール１回）

教　材　リポートセット
〈別送〉機関誌（４冊）
「誌上句会 投句集」・「誌上句会 作品集」（各２冊）

◆「俳句倶楽部」の特徴

リポート

・ワンポイント･アドバイスは全４回（１回につき、自由題５句提出）
・あなたの提出作品に、俳壇で活躍中の著名な実力派俳人が一言アドバイス。
・希望の講師を選べます。
※各講師には定員があります。一定数を超えた場合、ご希望の講師のアドバイスを受けられないことがあります。

誌上句会

・誌上で「句会」を楽しみます。
・会員の自選作品を掲載した作品一覧から２句選び（互選）、高得点の作品を作品集で発表します。

コンクール

・年１回のコンクールは「俳句倶楽部」会員同士で腕を競います。全投句作品が作品集に掲載されます。

コンクール選者　有馬朗人、宇多喜代子、大串　章、黒田杏子、鷹羽狩行、深見けん二、星野　椿、宮坂静生

講座の詳しい案内パンフレットを無料でお送りします。

フリーダイヤル 0120-06-8881 FAX042-574-1006

〒186-8001東京都国立市富士見台2-36-2　NHK学園　6B05 係
ホームページ https://www.n-gaku.jp/life

NHK学園　学習の旅　参加者受付中！

～小島健と行く俳句紀行～　村上鬼城と金子兜太

俳句講座専任講師小島健先生と共に俳人ゆかりの地を巡る人気シリーズ。今回は２人の俳人を取り上げます。

１人目は境涯作家として知られ、弱者への慈愛に満ち、格調高い作品が評価されている村上鬼城。鬼城がその風土を愛した高崎市周辺のスポットを吟行します。

もう１人は戦争などの社会問題を題材に自由な俳句の世界を築き、戦後を代表する俳人金子兜太。その生家や墓所を訪れ、ご子息から生前のお話しを伺います。

集合から解散まで専用のバスを利用しますので移動が大変便利です。

２人の名句を鑑賞しながら、吟行と句会を楽しめる俳句の旅にどうぞご参加ください。

期　　間　令和２年５月25日（月）～27日（水）（2泊3日）

同行講師　小島　健（俳句講座専任講師・「河」同人）

募集人数　30名（最少催行　20名）

主な訪問先　村上鬼城記念館、富岡製糸場、総持寺（金子家墓所）、壺春堂（金子兜太生家・記念館）

同行講師

小島　健

（こじま　けん）

（講師プロフィール）

昭和21年新潟県生まれ。NHK学園専任講師。角川春樹に師事。公益社団法人俳人協会常務理事。著作に『小島健句集』『俳句練習帖』ほか。

金子兜太先生（2018年没）

富岡製糸場『画像提供　富岡市』

添乗員の他に学習の旅カウンセラーも同行しますので、おひとりでも、初めての方でも、安心してご参加いただけます。

旅の思い出に、お寄せいただいた俳句を掲載した句集を作成し、後日お届けいたします。

ご参加、お待ちしております！

「学習の旅」の案内書は

NHK学園「学習の旅事務局」までお電話ください。

受付時間/月～金曜日（祝日除く）の９：30～12：00／13：00～17：30

TEL　042-572-3151（代表）

FAX　042-573-6090

生涯学習フェスティバル俳句大会 投句要領

全国各地や誌上での俳句大会を開催しています。どなたでもご参加いただけます。
規定の用紙（コピー可）でご投句ください。
ひとり何組でも、どなたでも応募できます。（自由題二句または自由題二句＋題詠一句）

◆題詠　※題詠は必ず指定の文字を入れてください。
　※題詠のみの応募はできません。

◆未発表の自作に限ります。（作者本人からの投句に限ります）

◆二重投句は固くお断りいたします。

◆投句後の作品訂正、さしかえはできません。

◆同一作品、酷似作品が先行して発表されていた場合、入選・入賞を辞退していただくことがあります。

投句料

①自由題二句の場合　2、000円
②自由題二句と題詠一句の場合　2、800円
　それぞれ、一冊の入選作品集代を含みます。

送金方法

◆郵便為替（定額小為替、普通為替を郵便局で購入）、現金書留、郵便払込のいずれかをご利用ください。（切手の代用は不可）

郵便払込をご利用の場合
郵便局においてある、郵便払込取扱票の通信欄に大会名、組数と投句料をご記入の上、払込みください。受領書のコピーを「のりづけ」欄に貼り付けて、ご応募ください。
口座番号：00190―5―336869
加入者名：NHK学園俳句大会事務局

賞・発表

◆大会大賞（文部科学大臣賞の候補作品となります）、市長賞、選者特選・秀作・佳作など。

◆入選上位内定者には事前に文書でお知らせします。
投句された方には当日会場で入選作品集をお渡しします。（誌上大会を除く）
会場参加されない方には、大会終了後に郵送します。

◆入選・入賞作品は、NHK学園で使用させていただくことがあります。

令和2年度　NHK学園生涯学習フェスティバル俳句大会開催（予定）

大会名称	開催（発表）予定日	投句締切	題	会　場
伊香保俳句大会	6月2日（火）	3月19日（木）	人	伊香保温泉　ホテル天坊
誌上俳句大会	8月13日（木）	5月12日（火）	和	――――
誌上俳句大会	11月12日（木）	8月14日（金）	本	――――
武蔵野市俳句大会	令和3年 3月20日（土）	12月18日（金）	光	武蔵野市民文化会館

NHK学園生涯学習フェスティバル

伊香保俳句大会

～群馬県渋川市～

今回で28回目となる恒例の大会です。
まだお越しでない方はぜひご参加下さい。

◇投句募集　自由題二句、題詠一句
題詠は「人」
題詠は「人」の漢字を必ず入れてください。

◇投句締切　令和2年3月19日(木)
消印有効

●日時　令和2年6月2日(火)
午後一時～四時

●会場　伊香保温泉　ホテル天坊

●選者　木暮陶句郎・鈴木章和
対馬康子・坊城俊樹

◇当日句募集
題「伊香保の夏を詠む」
当日、会場に自作一句をお持ち下さい。
入賞作品は会場にて発表いたします。

◆伊香保俳句大会へのご参加をお待ちしています。

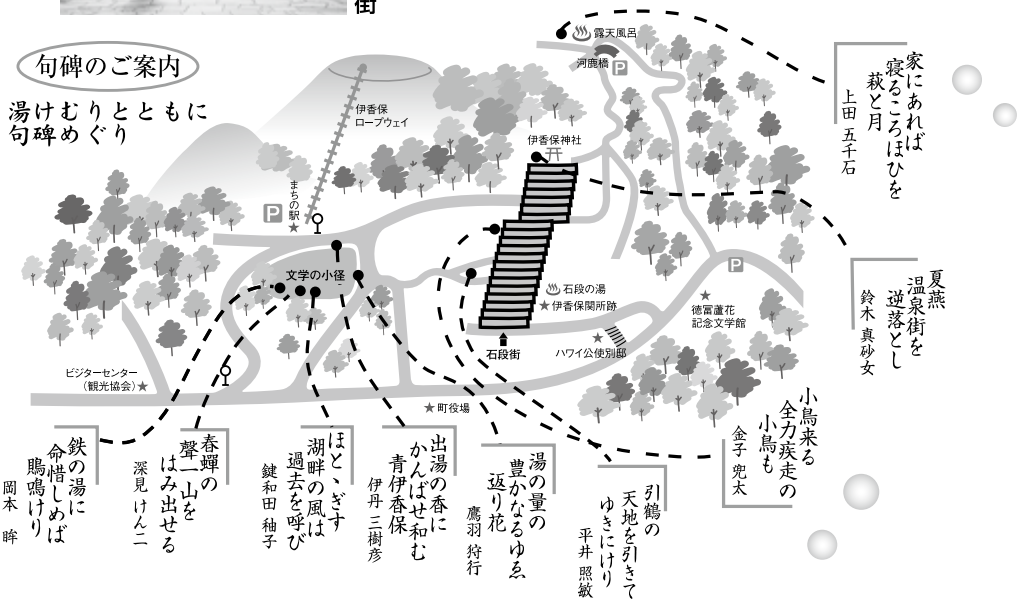
伊香保の町

湯の香ただよう石段街の町、伊香保。昔ながらの温泉情緒に加え、〝俳句の街〟としても多くの方々に親しまれています。そんな、伊香保ならではのひと時をお楽しみください。

多彩な魅力に満ちた、伊香保の温泉情緒

湯がでたのは、かれこれ二千年も前の話。長い歴史を持つ群馬県伊香保温泉の町並みは、名所石段街を中心に、昔ながらの素朴な温泉情緒でいっぱいです。石段をのぼり切った湯元温泉地横に、こじんまりとした佇まいながら開放感いっぱいの露天風呂が広がります。伊香保の湯は昔から子宝の湯として知られ、温度は43～45度、茶褐色でまろやかな湯質が特徴です。

石段街



ご宿泊・観光のお問い合わせは　社団法人 伊香保温泉観光協会　TEL 0279-72-3151 FAX 0279-72-4452

令和2年度　NHK学園 生涯学習フェスティバル

伊香保俳句大会投句用紙

投句締切 令和2年3月19日(木)消印有効

〒186-8001
東京都国立市富士見台2-36-2
NHK学園 伊香保俳句大会事務局

▲ご投句には、点線を切り宛先として貼ると便利です。

名　前	フリガナ （男・女） （　　歳）
作品集に掲載するお名前	フリガナ (本名と違う場合のみご記入ください)
住　所	〒 都道府県
電話番号	―　―
生年月日	大正・昭和・平成　年　月　日　※任意でご記入ください。

「投句用紙」に記載された個人情報は、今大会の運営に使用するほか、NHK学園の俳句大会、通信講座のご案内に使用させていただく場合があります。それ以外の用途による使用は一切いたしません。

のりしろ

投句料を郵便払込された方は振替払込受付証明書（お客さま用）を貼ってください。証明書がない場合は下記へ払込日をご記入ください。

●投句料
自由題二句の場合　2,000円
自由題一句と題詠一句の場合　2,800円

●投句料の支払い方法に○印をつけてください。
・郵便払込（　月　日に払込）
・現金書留
・定額小為替
・普通為替

大会当日会場に	参加する（会場参加は無料）　参加しない

※印がない場合は、不参加とさせていただきます。
※入場券は、複数組投句の場合も投句者1名につき、1枚（2名様入場可）発行です。投句せずに会場参加をご希望の方は、往復はがきで別途お申込みください。

受付番号（NHK学園記入）

〈キリトリ線〉

もう一度ご確認ください
- 未発表・自作に間違いありませんか
- 誤字脱字はありませんか
- 二重投句（同一作品を他へ投句）していませんか

- 作品の控えをお手元に残してください
- 作品投句後の訂正には応じられませんので、ご了承ください。

府都県道

作品集にお掲載する名前	〈フリガナ〉

受付番号（NHK学園記入）

自由題1

自由題2

題「人」（希望者のみ）「人」の漢字を必ず入れてください。　※題詠のみの投句はできません。